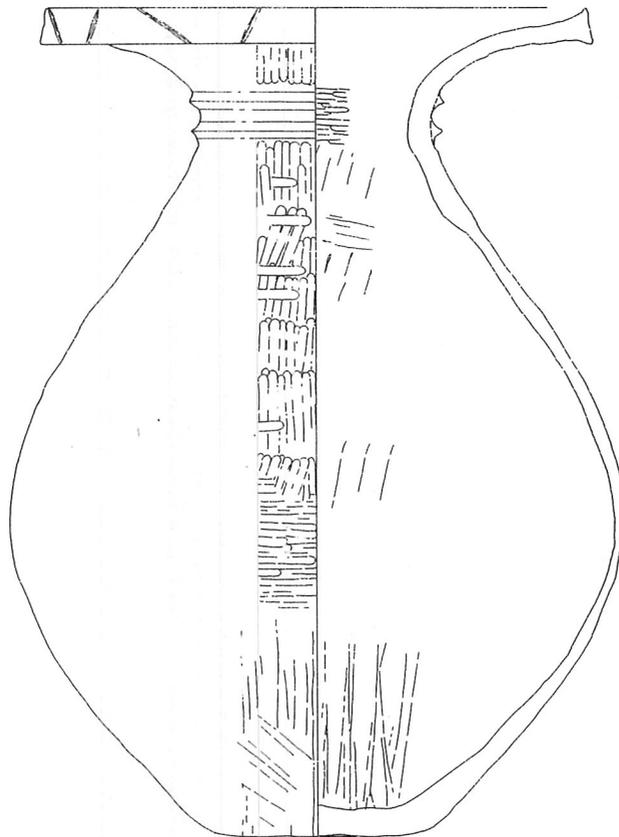


財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第1集

広島市佐伯区倉重一丁目所在

倉重向山遺跡 発掘調査報告

1991・3



財団
法人 広島市歴史科学教育事業団



倉重向山遺跡・古墳遠景（西から）

は し が き

近年、広島市の発展に伴い、市街地周辺の丘陵地域にも宅地造成の開発が次々に進められています。

佐伯区においても、道路網の整備、大規模な住宅団地の造成等により、埋蔵文化財の調査件数が急激に増加しており、極楽寺山から広島湾に向かって延びる丘陵上に位置する倉重向山遺跡も、宅地造成に伴い、記録保存のための調査を行ったものです。

この発掘調査は、平成2年5月から9月まで実施しました。その結果、この地域を統括した首長の墓である前方後円墳と弥生時代の住居跡などの遺構と、数多くの遺物を検出し、この地域の当時の歴史を明らかにするための貴重な資料を得ることができました。なお、前方後円墳は、土地所有者の御理解・御協力をいただき、緑地として現状保存されることになりました。

この報告書が、多くの方々に活用され、郷土の歴史文化について理解を深めるうえで少しでも役立てば幸いです。

終わりになりましたが、調査にあたり、御指導・御助言を賜りました諸先生方、並びに発掘調査に御協力をいただきました地元の方々に心からお礼を申し上げます。

平成3年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

理事長 鍋 岡 聖 剛

例 言

- 1 本書は、広島市佐伯区倉重一丁目における住宅団地建設に伴い、平成2年度に実施した倉重向山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社もみじ建設から委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
- 3 本書は、Ⅰ・Ⅳを稲葉瑞穂が、Ⅱ・Ⅲを吉原輝明が執筆し、稲葉が編集した。
- 4 遺構の実測及び写真撮影は、稲葉・吉原・高下洋一が分担して行った。
- 5 遺物の実測及び写真撮影は、稲葉・吉原が分担して行った。
- 6 図面のトレースは、稲葉・吉原・岡野孝子・住川香代子が分担して行った。
- 7 本書掲載の航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
- 8 第1図に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図を複製したものである。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	4
III	倉重向山遺跡	6
IV	倉重向山古墳	20

挿図・表目次

第1図	周辺遺跡分布図	2	第13図	出土土器実測図(1)	34
第2図	遺跡周辺地形図(昭和22年)	3	第14図	出土土器実測図(2)	35
第3図	遺跡周辺地形図	折り込み	第15図	出土土器実測図(3)	36
第4図	倉重向山遺跡遺構配置図	折り込み	第16図	出土土器実測図(4)	37
第5図	第1・2号住居跡実測図	27	第17図	出土土器実測図(5)	38
第6図	第3号住居跡実測図	28	第18図	出土土器実測図(6)	39
第7図	第4号住居跡実測図	29	第19図	出土土器・鉄器実測図	40
第8図	第5・6号住居跡実測図	30	第20図	倉重向山古墳地形測量図 及びトレンチ配置図	折り込み
第9図	第7号住居跡実測図	31	第21図	倉重向山古墳主体部(T1)断面図	42
第10図	第1号土壙遺物出土状況	32	第22図	倉重向山古墳くびれ部(T3)断面図	42
第11図	第2号土壙実測図	33	表	倉重向山遺跡出土土器観察表	11
第12図	第3号土壙実測図	33			

図版目次

- 巻頭図版 倉重向山遺跡・古墳遠景（西から）
- 図版 1 a. 倉重向山遺跡・古墳全景（調査前，南から）
b. 倉重向山遺跡全景（調査後，南から）
- 図版 2 a. 第1・2号住居跡（東から）
b. 第3号住居跡（北から）
- 図版 3 a. 第4号住居跡（西から）
b. 第5・6号住居跡（東から）
- 図版 4 a. 第7号住居跡炭化物検出状況（西から）
b. 第7号住居跡（完掘後，東から）
- 図版 5 a. 第1号土壌土器出土状況（北から）
b. 第1号土壌（完掘後，北から）
- 図版 6 a. 第2号土壌（南から）
b. 第3号土壌（東から）
- 図版 7 倉重向山遺跡出土土器（1）
- 図版 8 倉重向山遺跡出土土器（2）
- 図版 9 倉重向山遺跡出土土器（3）
- 図版 10 倉重向山遺跡出土土器（4）
- 図版 11 倉重向山遺跡出土土器（5）
- 図版 12 倉重向山遺跡出土土器・鉄器
- 図版 13 a. 倉重向山古墳遠景（調査前，南から）
b. 倉重向山古墳近景（調査前，前方部から）
- 図版 14 倉重向山古墳全景（調査後，西から）
- 図版 15 第1トレンチ（主体部，南から）
- 図版 16 a. 第2トレンチ（後円部，南から）
b. 第3トレンチ（くびれ部，南から）
- 図版 17 a. くびれ部石列検出状況（南から）
b. くびれ部石列検出状況（西から）
- 図版 18 a. 第4・5トレンチ（前方部側面，南から）
b. 第6トレンチ（前方部正面，西から）

はじめに

広島市教育委員会は、1989（平成元）年11月21日、広島市佐伯区倉重一丁目における団地造成計画について協議を受け、計画区域内の埋蔵文化財の分布調査を行い、その存在を確認した。そこで、事業主である株式会社もみじ建設と遺跡の取り扱いについて再三協議を重ねたが、現状保存は困難であり、記録保存によることもやむを得ないと結論に達した。

株式会社もみじ建設は、財団法人広島市歴史科学教育事業団に調査を委託して行うこととし、調査は、財団法人広島市歴史科学教育事業団において1990（平成2）年4月から準備を始め、同年5月14日から9月29日までの期間実施した。

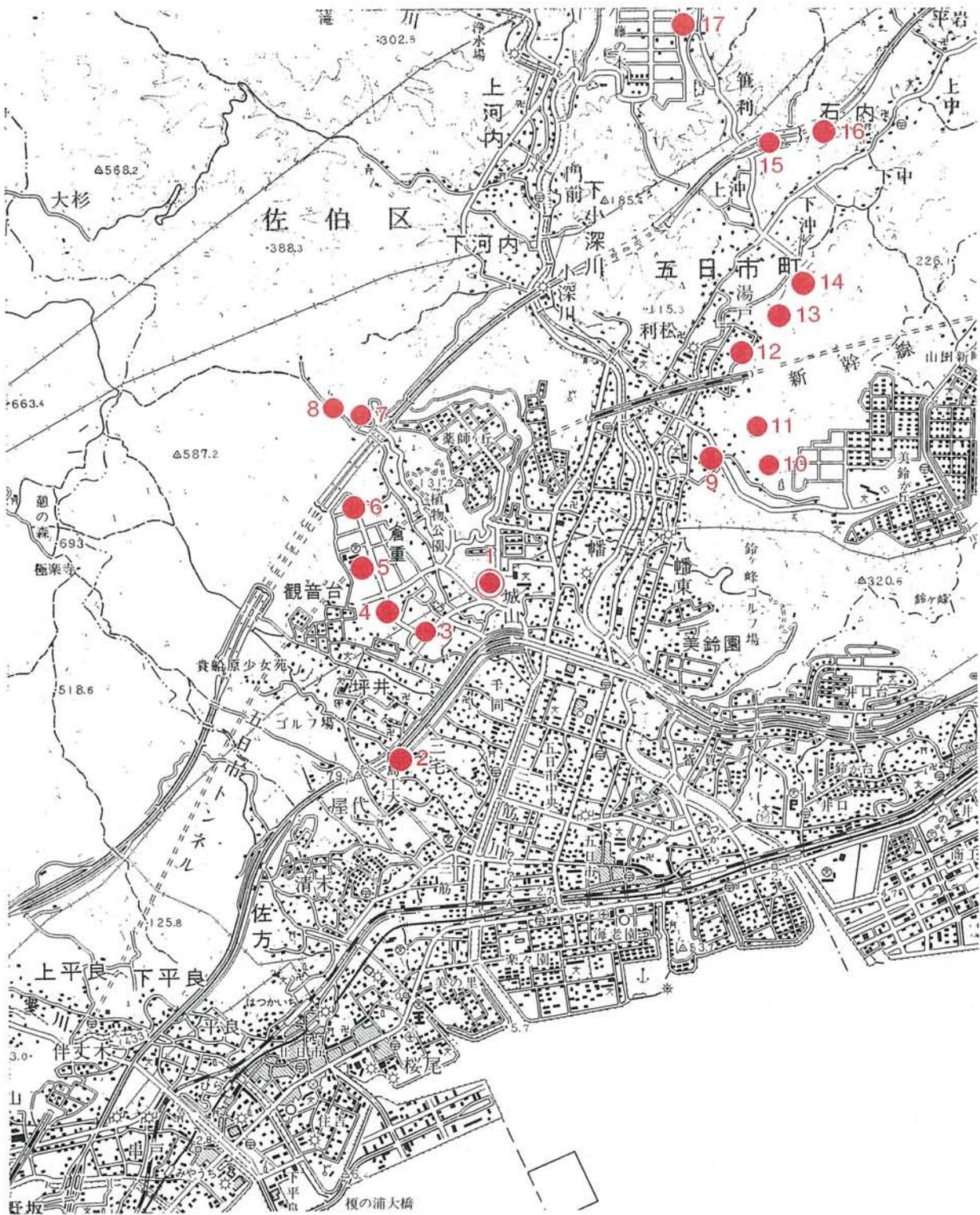
なお、調査の関係者は次のとおりである。

調査委託者 株式会社もみじ建設
調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団
調査担当係 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課事業係
調査関係者 片岡寿一 常務理事
若野健二 文化財課長
幸田 淳 事業係長
若島一則 事業係主査
岡野孝子 事業係嘱託
調査者 稲葉瑞穂 事業係主事（調査担当者）
吉原輝名 事業係主事（調査担当者）
高下洋一 事業係学芸員補

調査補助員（順不同）

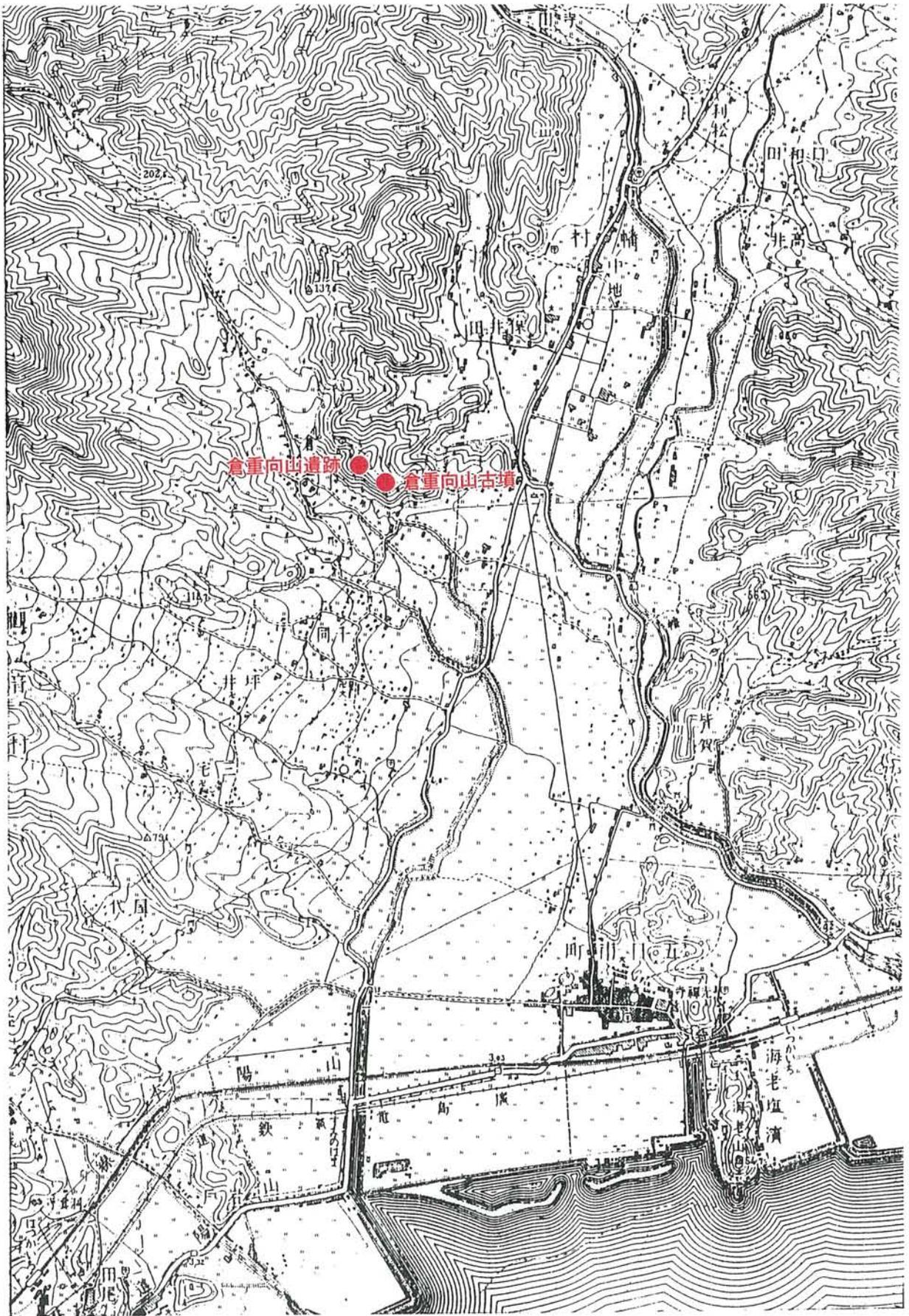
伊藤 定、上熊由美子、川本時子、永田志津子、永田 勝、杉之原ハナヨ、渡辺サツエ、高宮トシ子、進藤八重子、新谷八重子、大方 一、橋本美智枝、舛田愛子、市橋カメエ、義野育子、椎木良子、長尾明子、松谷万里子、松村美保子、大野みよ子、車 順子、前川恭子、松村一子、中前ユキミ、植木恭子、田中マツヨ、田中君子、古川光江、河合淳子、住川香代子、佐伯ひとみ、小林和子

なお、株式会社もみじ建設、飛鳥建設株式会社、広島市教育委員会、八幡公民館、坪井公民館ほか多くの方々には、調査を円滑に進めるため、多大な御配慮と御協力をいただいた。また、調査中、広島大学文学部考古学教室潮見浩教授（文学部長）、河瀬正利講師、古瀬清助手から貴重な御指導、御助言をいただいた。さらに、報告書の作成にあたっては、山口県埋蔵文化財センター主任乗安和二三氏、北九州市立考古博物館副館長武末純一氏、（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室前田義人氏ほか多くの方々から広範な御教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。



- | | | | | |
|--------------|------------|------------|------------|-----------|
| 1. 倉重向山遺跡 | 2. 三宅古墳 | 3. 月見城遺跡 | 4. 白禿遺跡 | 5. 倉重古墳 |
| 6. 倉重2号遺跡 | 7. 稗畑遺跡 | 8. 栄草原古墳群 | 9. 高井遺跡 | 10. 小林遺跡 |
| 11. 城ノ下A地点遺跡 | 12. 和田1号遺跡 | 13. 下沖5号遺跡 | 14. 下沖3号遺跡 | 15. 浄安寺遺跡 |
| 16. 水島城遺跡 | 17. 笹利迫田遺跡 | | | |

第1図 周辺遺跡分布図



第2図 遺跡周辺地形図（昭和22年）

II 位置と環境

倉重向山遺跡は、広島市佐伯区倉重一丁目2209番に所在する弥生時代後期の集落跡及び前方後円墳である。本遺跡は、通称極楽寺山から東南に派生する丘陵上に位置しており、標高は85m～110m、周囲の水田面からの比高は60mである。西側には、極楽寺山に向かって谷が深く入り込んでおり、直下には倉重川が流れ、水田が開けている。湯来町より源を発した八幡川は、本遺跡先端の東側で石内川と合流し広島湾に注いでいる。本遺跡からはこれら八幡川、石内川が形成した沖積平野が見渡され、南方に五日市の市街地や広島湾を一望することができる。この沖積平野に向け延びる低丘陵上には、最近の発掘調査により多くの遺跡が確認されており、特に石内川流域は市域でも遺跡の密集する地域として注目されている。中でも本遺跡と同様の弥生時代後期の集落跡は多く、最近の発掘調査によると浄安寺遺跡、下沖5号遺跡などの規模の大きな集落跡をはじめ水晶城遺跡、笹利迫田遺跡、下沖3号遺跡、城ノ下A地点遺跡などが確認されている。一般に広島市域においては弥生時代後期以降、遺跡の数が急激に増加する傾向にあると言われており、八幡川、石内川流域においても同様の傾向にあるといえる。古墳については、高井古墳、和田古墳、城ノ下古墳群などが知られている。なお、城ノ下A地点遺跡は、平成2年度に発掘調査が行われ、10基の古墳が確認されている。

本遺跡が位置する八幡川下流域の倉重地区一帯は、数本の小河川によって形成された幅約200mの深い谷が入り込んでおり、この谷に沿って南に緩く丘陵が派生している。遺跡は、これらの丘陵に谷を取り囲むようにして数多く点在している。このうち、発掘調査等によってその概要がわかっているものとして、倉重2号遺跡、白禿遺跡、寺山遺跡、稗畑遺跡があり、いずれも弥生時代後期の集落跡が確認されている。本遺跡の南西に谷をはさんで南に延びる丘陵上にある倉重2号遺跡からは、竪穴式住居跡3軒、土壇3基が検出され、そこからさらに南へ延びる丘陵の白禿遺跡からは、竪穴式住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、土壇6基、さらに南側の単独丘陵にある寺山遺跡からからは、竪穴式住居跡1軒がそれぞれ検出されている。また、本遺跡の北西に深く入り込む谷の最奥部あたりに位置する丘陵には稗畑遺跡があり、平成2年度、発掘調査が行われた結果、竪穴式住居跡約50軒（建て替え分も含む）のほか土壇、掘立柱建物跡などの存在が確認され、当地域としては最大規模の集落跡として重要な位置を占めることになるであろう。

次に、古墳時代のものとして、この地域周辺に何基かの古墳の存在が知られている。その中で発掘調査が行われたものとして、月見城古墳群、倉重古墳、三宅古墳があげられる。このうち、前半期の古墳として位置づけられているものは、11基の古墳を検出した月見城古墳群である。内部主体は、木棺を直葬した土壇であり、それぞれの規模は小さいが、その数が多く、前述の城ノ下A地点遺跡同様注目される。他の倉重古墳、三宅古墳は、いずれも後半期の古墳として位置づけられており、横穴式石室を内部主体としている。このほか、発掘調査は行われていないが、後半期の古墳として栄草原古墳群が知られている。この地域の古墳築造の時期及びその変遷については、すでに消滅しているものも多く不明な点も多い。総じて前半期に属する古墳は少なく、しかも、八幡川流域の他地域と比較して群を抜いて大規模な古墳は発見されていない。

今回発見された倉重向山古墳は、前半期に比定される前方後円墳であり、八幡川流域としては初めて、市内でも5例目に当たる。本古墳の被葬者は、眼下に広がる湾岸地域及び八幡川流域において、中心的な地位を占めていたと考えられ、本古墳の存在は、八幡川流域における古墳文化を考えるうえで極めて重要であるといえよう。

注

1. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(企)1986
2. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
3. 注1に同じ
4. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『笹利迫田遺跡発掘調査報告書』1985
5. 注2に同じ
6. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告書』1991

7. 五日市町誌編集委員会『五日市町誌』上巻 1974
8. 注2に同じ
9. 広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』1990
10. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』1987
11. 注10に同じ
12. 注7に同じ
13. 1990年度、財団法人広島市歴史科学教育事業団が発掘調査を実施した。
14. 注10に同じ
15. 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』
16. 注7に同じ
17. 注7に同じ
18. 中小田1号古墳（安佐北区口田），弘住1号古墳（安佐北区口田），宇那木山2号古墳（安佐南区緑井），神宮山1号古墳（安佐南区緑井）

III 倉重向山遺跡

1. 遺跡の概要

倉重向山遺跡は、極楽寺山より東南に派生した標高90mから110mの丘陵上に立地している。西側の谷は北西へ深く入り込み、直下を倉重川が流れ三筋川に合流している。付近の水田面からの比高は約60mである。本遺跡の遺構は、調査の結果、尾根の頂部よりほぼ直角に分かれて延びている2つの尾根に分布していることを確認した。このうち南西方向に延びる尾根からは、竪穴式住居跡6軒（第1号～第6号住居跡・建て替えを含む。）、土壌3基を、南東方向へ延びる尾根からは、竪穴式住居1軒（第7号住居跡）を検出した。遺構内及びその周辺からは、弥生式土器及び鉄器が出土した。

2. 遺構

(1) 住居跡

第1号・第2号住居跡（第5図）

本住居跡は、尾根線をやや東にはずれた本遺跡中最高所に位置する重複した竪穴式住居跡である。急斜面を削平して平坦面を造り出しており、北及び西側で壁及び床を遺存する。西側から床面の高い順に第1号住居跡、第2号住居跡と呼称する。

第1号住居跡は、東側で第2号住居跡と切り合う。床面は、幅100cm、奥行き120cmを遺存する。推定される平面プランは、方形で、壁高は、北側で最も高く63cmである。壁溝は、深さ2cm、幅10cm～20cmで北側のみ巡っている。柱穴は1か所（P1）のみ検出された。第2号住居跡の北側壁面に、第1号住居跡の床面レベルとほぼ一致する高さで2か所に狭小な段が検出されており、第1号住居跡の壁面の方向とも一致することから、本住居跡の床面は少なくとも東側の段あたりまで広がっていたと推定できる。本遺跡に伴う遺物としては、弥生土器（No. 1, No. 2, No. 3, No. 4, No. 5）が出土しており、その特徴から本住居跡は、上深川(壺)式古段階の時期の遺構と考えられる。

第2号住居跡は、西側と北側で壁が遺存しており、北隅で最も高く約80cmである。西側、北側とも一部に壁溝が巡り、規模は、深さ3cm、幅10cmである。床面は、最も遺存状態のよい部分で250cm、奥行き140cmである。柱穴は、2か所（P2, P3）検出された。壁との位置関係及び本住居跡の立地状況から、本住居跡は2本柱構造であったと考えられ、推定される平面プランは長辺約300cm、短辺約250cm前後の長方形であったと考えられる。本住居跡に伴う遺物としては、P2周辺より弥生土器（No. 6, No. 7, No. 8, No. 9, No. 10, No. 11）がまとまって出土しており、その特徴から本住居跡の営まれた時期は、上深川(壺)式の時期と考えられる。なお、本住居跡からは、高坏や器台が多く出土している点が注目される。

第3号住居跡（第6図）

本住居跡は、第1・2号住居跡の西側斜面につくられた住居跡である。ほぼ尾根線上に立地しており、本遺跡中で最も規模の大きな住居跡である。壁は、全体の約3分の2が遺存し、壁高は北側で最も高く53cmであり、南側で徐々に低くなり消滅する。推定される平面プランは、円形と考えられ、直径約550cmである。柱穴は4か所から検出した。壁溝は南側及び北側の一部を除いて深さ4～7cm、幅10～15cmで巡る。床面のほぼ中央付近に深さ約13cm、幅約90cmと深さ約6cm、幅約60cmの不整形のくぼみを検出した。この2か所のくぼみ内及びくぼみ周辺からは炭混じりの黒色土が検出されたが、後者のくぼみについては、位置の点で若干の疑問は残るが、いずれのくぼみからも炭混じりの黒色土を検出しているため炉跡となる可能性が考えられる。また、炉跡付近の床面から長辺30cm、短辺25cm、厚さ7cm程度の平坦な石を2点検出した。2点とも上面のレベルが一致しており、ほぼ水平を保っているという特徴を持つ。本住居跡内の床面からは弥生土器（No. 27）鉄鏃（No. 56, No. 57, No. 58）を、埋土中から弥生土器（No. 28, No. 29）と土製の紡錘車（No. 60）を検出した。出土した土器の特徴から本住居跡は、上深川(壺)式古段階の時期の遺構であると考えられる。

第4号住居跡（第7図）

本住居跡は、第3号住居跡の西側約5mの尾根線を西にはずれた斜面から検出した。東側のみに壁と壁溝が遺存する。壁高は最高で36cmである。壁溝は、深さ2～4cm、幅5～15cmで遺存部分のほ

ぼ2分の1に巡る。遺存する床面の幅は最大で250cmである。この床面の地山の落ちぎわから斜面側に1～2cmの角礫を多く含む土層を検出した。この土層の上面は水平を保っており、本住居跡の床面レベルと一致することから本住居跡の床面が整地層まで広がると考えられる。また、この整地層の斜面下側には、赤褐色の粘土質の層を検出しており、本遺跡内から同様の粘土質層が見つかっていないことなどから考えて、この粘土質層は本住居跡の床面を拡張する際に意図的に施された盛土である可能性が強い。整地層は地山の落ちぎわから斜面側に約1mの範囲で検出されており、本住居跡の床面は少なくとも奥行きが、200cm程度であったものと推定できる。柱穴と考えられるピットは、3か所(P1, P2, P3)から検出されたが、壁との位置関係からP2-P3の主柱穴の組み合わせが想定できる。P1については、位置的に主柱穴とは考えにくい、形状及び規模の点でP2, P3と比較してさほど差異が認められないため、柱穴として何らかの役割を果たしていたものと考えられる。なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は見つからない。

第5・6号住居跡(第8図)

本住居跡は、第3号住居跡の南西約6mのほぼ尾根線上に位置する重複した住居跡である。東側から床面の高い順に第5号住居跡、第6号住居跡とした。第5号住居跡は、西側で第6号住居跡と切り合い、北側と東側で壁及び壁溝が遺存している。壁高は東隅が最も高く72cmである。壁溝の規模は、深さ2～7cm、幅7～20cmである。本住居跡に伴う柱穴は、6か所(P1, P2, P4, P5, P6, P7)検出された。その規模及び位置関係からP1-P2の2本柱の構造が推定できる。P4, P5, P6, P7については、いずれも壁溝の両端部分に対応するように位置しており、支柱としての何らかの役割を果たしていたことが考えられる。遺存部分から推定される平面プランは、1辺300cm前後の隅丸方形となろう。P1とP2の間に、炉跡と考えられる長軸70cm、短軸30cm、深さ13cmの不整形のくぼみを検出した。本住居跡内からは、土器(No. 31, No. 32, No. 33)が出土しており、その特徴から本住居跡は、上深川(壺式)古段階の時期の遺構であるといえる。

第6号住居跡は、東側で壁と壁溝の一部を遺存しているのみである。その平面プランを推定することはできないが、西側の地山の落ちぎわまで幅300cm、奥行き150cmの平坦面を有していることから住居跡とした。第5号住居跡の床面のレベル差は、約20cmである。壁溝は、深さ9～14cm、幅20～25cmである。柱穴と考えられるピットは、2か所(P2, P3)から検出されたが、その位置等から、斜面側にも柱穴があったものと考えられる。第6号住居跡に伴う遺物は検出されていない。なお、第5号住居跡と第6号住居跡の新旧の関係については、明確にし得なかった。ただ、P2を共有することから、連続して営まれたものと思われる。

第7号住居跡(第9図)

本住居跡は、第1号住居跡～第6号住居跡のある尾根から南東方向へほぼ直角に延びる尾根の南西側斜面に立地する。壁は、全体の5分の3が遺存し、南西斜面側は流失している。壁高は、東側で最も高く66cmである。壁溝は、遺存部分をほぼ全周しており、その規模は、深さ3～7cm、幅12～25cmである。推定される平面プランは、直径約540cmの円形となろう。柱穴は5か所(P1, P2, P4, P5)から検出された。いずれも壁からの距離、形状、規模がほぼ等しいことから本住居跡は、5本柱の構造と考えられる。また、床面から長軸140cm、短軸95cm、深さ15cmの不整形のくぼみを検出した。これは、5本の主柱穴で囲まれた床面のほぼ中央に位置することから炉跡と考えられる。なお、本住居跡の床面からは、炭化材が検出された。そのほとんどがP2及びP3周辺から検出され、壁と壁溝部分及び住居の南側からは全く見つからない。炭化材の検出は、高いものでも床面から14cmの高さのところもあったが、大部分は床面上からのものであった。本住居跡に伴う遺物としては、弥生土器(No. 39, No. 40, No. 41, No. 42, No. 43, No. 44, No. 45, No. 46)を検出した。その特徴から本住居跡は、上深川(壺式)の時期に位置付けられよう。

(2) 土 壙

第1号土壙(第10図)

第1号土壙は、第3号住居の西端に位置し、第3号住居跡と切り合って検出された。平面プランは、方形を呈し、検出面での規模は深さ約45cm、上縁部で短辺80cm、長辺100cm、底部が一辺約70cmである。断面はやや逆台形を呈し、底面は平らである。本土壙からは、底面よの遺構であるといえる。

り大型の壺形土器（No. 47）が、埋土中より（No. 48, No. 49, No. 50, No. 51, No. 52）が出土した。出土状況から見て、土器が据え置かれた様子は認められない。ただ土壌内の堆積土は攪乱されておらず、土層にも明確な変化が認められないことから、ほぼ同時期に投棄されたものと考えられる。上記の土器（No. 47）は、弥生時代中期後半の特徴を持っており、本土壙は本遺跡中唯一の弥生時代中期の遺構である。また、埋土中の土器（No. 48, No. 49, No. 50, No. 51, No. 52）は、すべて底部である。なお、先述した土器の出土状況等から考えて、本土壙は貯蔵穴としての性格も考えられるが、周囲の地形から考えて第3号住居による削平をそれほど受けているとは考えがたく、深のさ点で若干の疑問が残る。

第2号土壙（第11図）

第2号土壙は、尾根線を西にはずれた斜面に位置しており、第5・6号住居跡の西側に隣接している。平面プランは、ほぼ楕円形を呈し、規模は検出面で上縁部長軸135cm、短軸95cm、底部で長軸105cm、短軸80cm、深さ33cmである。底面はほぼ水平で、断面形はやや袋状を呈しており、貯蔵穴と考えられる。その位置から第5号住居跡との関係が指摘できよう。本土壙内からは、弥生土器（No. 55）を検出した。その特徴から本土壙は、上深川壙式の時期に位置づけられよう。

第3号土壙（第12図）

第3号土壙は、第6号住居跡より南西に約13m下がった本尾根中最も平坦な部分に位置している。平面プランは長方形を呈し、規模は、上縁部で長辺280cm、短辺150cm、底部で長辺250cm、短辺120cm、深さは、最高82cmである。底面は水平で、断面形は、逆台形状を呈する。土壙内からは、弥生土器細片が少量出土しただけであり、周囲からも遺物が見つかっておらず、本土壙の性格については明らかにしがたいが、その形状から墳墓の可能性が考えられる。

3. 遺物

本遺跡からは、弥生土器、鉄器（4点）、紡錘車（土製）が出土した。弥生土器の器種は、甕形土器、鉢形土器、壺形土器、器台形土器、高坏形土器が確認された。鉄器は、鍬（3点）、鑿（1点）である。以下、各遺物について述べる。なお、個々の土器の詳細については、後掲する観察表にゆだねる。

（1）弥生土器（第13図～第19図）

出土した土器の大半は、第1、第2号住居跡内及びその周辺から出土している。多くは、破片の状態出土しており、器形全体を推定し得るものは、大型の壺形土器（No. 47）と高坏（No. 6）のみである。土器の大半を占める甕形土器、鉢形土器について見てみると、全体に口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たく、あるいは、丸くおさめるものが見られる。口縁部の接合部分については、屈曲部内側に明瞭な稜を有するものと、比較的平らな面を1段有して後、「く」の字状に外反させているものがある。これらの土器には、口縁部の屈曲部周辺の厚さと、口縁端部の厚さがほぼ同じ、あるいは端部にいくにつれて徐々に薄くなるという特徴が認められる。この特徴は前者は上深川壙式、後者は上深川壙式に属するものと考えられる。次に高坏については、ほぼ完形の（No. 6）のほか、（No. 7, No. 17, No. 27）等、合わせて6個体分が出土している。器形の特徴として、坏部が僅かに内湾し、口縁端部がやや内傾気味に短く立ち上がり、丸くおさめるもの（No. 6, No. 7, No. 27）と坏部が、中位で稜を有して屈曲し、口縁はやや外湾気味にひろくもの（No. 17）とに分けられる。No. 6に類似したものは、従来、出土例が少なく市内では、池の内遺跡で出土している程度であったが、近年、八幡川流域の調査が進む中で稗畑遺跡及び城ノ下A地点遺跡においても類似のものが出土している。器台も2点（No. 16, No. 26）が出土しており、それぞれ異なる特徴を有している。このうち、No. 16はラッパ状に広がる受部に粘土を貼りつけて斜め下方に拡張した口縁部を持ち、口縁部外面には、3か所に逆U字形の凸帯と斜格子文を施し、内外面ともていねいへら磨きが施されていて、本遺跡出土の土器の中では特異なものである。No. 26は、受部の器形は推定しにくいだが、全体にていねいなハケ目が施されている。

第1号土壙内より出土した大型の壺形土器（No. 47）は、口縁部が、ラッパ状に大きく外反し、端部外面を斜め下方へ下垂させている。このような特徴を持つ大型の壺は、一般に周防地方でしばしば見られるもので弥生時代中期に位置付けられている。また、第1号土壙内から出土した土器（No. 48, No. 49, No. 50, No. 51, No. 52）もその出土状況及び特徴からNo. 47と同じ時期の

ものと思われる。

(2) 鉄器 (第19図)

鏃 (No. 56~No. 58)

No. 56は、第3号住居跡内より出土したものである。腸挟をもち、残存長29mm、残存最大幅19mmである。

No. 57は、第3号住居跡床面より出土したものである。斧箭形式鉄鏃に類似し、刃部は、わずかに湾曲し、残存長17mm、最大幅12mmである。身部は、断面方形を呈し、厚さ15mmである。

No. 58は、第3号住居跡床面より出土したものである。刃部及び身部、茎部の区別は不明瞭で茎部は、とがり気味である。全長38mm、刃部最大幅17mmである。

鑿 (No. 59)

第5号住居跡東側斜面より出土したものである。残存長42mm、最大幅8mm、厚さ8mmを測り、断面形はほぼ正方形を呈する。刃部は徐々に薄くなる両刃であり、突き鑿と考えられる。

(3) 土製紡錘車 (No. 60)

第3号住居跡埋土中より出土したものである。全体の約4分の1の破片で、復元すると直径約40mmの円形を呈すると思われる。厚さはほぼ等しく約13mmであり、直径約6mmの孔が焼成前に穿孔されている。表面は、滑らかに仕上げられている。

注

1. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』1988
なお、時期的位置づけについては、上深川(監)式を弥生時代後期中葉~後葉に、上深川(企)式古段階を弥生時代後期末~古墳時代初頭として整理し、以下すべてこれに準拠した。
2. 注1に同じ
3. 広島市教育委員会『池の内遺跡発掘調査報告』1985
4. 1990年度、財団法人広島市歴史科学教育事業団が発掘調査を実施した。
5. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』1991
6. 日本道路公団徳山工事事務所、山口県教育委員会 山陽自動車道『岡山遺跡』- 島田川流域遺跡群の調査- 1987
島根県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査報告書』1980
7. 大村 直「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号

倉重向山遺跡出土土器観察表

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
1	第1号住居跡内	不明		口縁部は外反し、端部は摘んで仕上げ平たくおさめる。	外面 ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 赤褐色 粘土 やや密 焼成 良
2	第1号住居跡内	甕形土器	口径 17.7 胴部最大径 20.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや薄手となり丸くおさめる。胴部は球状にやや張る。	外面 口縁部はナデ、胴部はハケ目。 内面 口縁部及び屈曲部はハケ目後ナデ、以下ヘラ削り。	色調 外面 赤褐色 内面 橙褐色 胎土 密 焼成 良
3	第1号住居跡	甕形土器	口径 16.0 胴部最大径 13.9	口縁部は「く」の字状に大きく外反し、端部は平たくおさめる。胴部は球状によく張る。	外面 口縁部はナデ、屈曲部及び胴部はハケ目。 内面 口縁部はハケ目後ナデ、以下ヘラ削り後ハケ目。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
4	第1号住居跡内	甕形土器	口径 16.4 胴部最大径 16.0	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は摘んで仕上げ平たくおさめる。内面屈曲部に稜を有する。	外面 口縁部はハケ目後ナデ、胴部ハケ目。内面 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調 橙褐色 胎土 やや密 焼成 良 口縁部及び肩部にスス付着。一部黒斑。
5	第1号住居跡内	甕形土器	口径 14.7 胴部最大径 16.5	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。内面屈曲部に稜を有する。胴部は球状にやや張る。	外面 磨滅が著しく、調整不明。 内面 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調 外面 橙褐色 内面 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 胴部にスス付着。
6	第2号住居跡内	高坏	口径 26.0 器高 21.8 底径 16.7	受部はわずかに口縁部に向け内湾し、端部はやや内傾気味に短く立ち上がり丸くおさめる。脚部は徐々に開きながら裾部に移行し、端部は内傾して平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目。 内面 受部は口縁部ナデ、以下ハケ目後ヘラ磨き。脚部は上半部ヘラ削り後ハケ目、以下ハケ目。 脚裾部に5方向からの透かしをもつ。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
7	第2号住居跡内	高坏	口径 39.0	受部はわずかに口縁部に向けて内湾し、端部は内傾して短く立ち上がり丸くおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ及びヘラ磨き。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 内面に黒斑。

番 号	出土位置	器 種	法 量(cm)	器 形	調整・成形	備 考
8	第2号住居跡内	不 明	底径 3.6	平底の底部をつ。	外面 ハケ目。 内面 ヘラ削り。	色調 橙褐色 外面 橙褐色 内面 赤褐色 胎土 密 焼成 良 一部にスス付着。
9	第2号住居跡内	壺形土器	口径 14.1	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は直立気味に立ち上がり丸くおさめている。肩部はやや張る。	外面 ナデ。 内面 口縁部及び口縁屈曲部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁直下に貝殻復縁による押引文を施す。	色調 橙褐色 胎土 やや密 焼成 良 肩部にスス付着。
10	第2号住居跡内	不 明		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は摘んで仕上げ平たくおさめる。	外面、内面ともナデ。	色調 暗褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟
11	第2号住居跡内	不 明		ラッパ状に広がる脚部である。	外面 丁寧なヘラ磨き。 内面 裾部ナデ及びヘラ磨き。一部、搾り痕が認められる。 脚の5方向に2段にわたり、丸い透かしを施す。	色調 橙褐色 胎土 やや密 焼成 良
12	第1号住居跡埋土中	壺形土器	口径 11.5	ゆるやかに外反しながら直立気味に立ち上がる口縁部をもち端部は平たくおさめる。胴部は球状に張る。	外面 ハケ目。 内面 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調 橙褐色 胎土 やや密 焼成 良 脚部にスス付着。
13	第1号住居跡埋土中	椀	口径 5.7 器高 5.1	手づくね土器である。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
14	第1号住居跡埋土中	不 明		脚裾部の破片でやや内湾し、端部は平たくおさめる。	外面 ハケ目。 内面 ナデ。 脚端部に棒状工具による刺突文を施す。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
15	第1・2号住居跡南側斜面	鉢形土器	底径 5.3	平底の底部から内湾気味に立ち上がる胴部をもち、ゆるやかに外湾しながら口縁部へ移行する。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁部周辺ハケ目。以下ヘラ磨き。	色調 橙褐色 胎土 密 焼成 良

番 号	出土位置	器 種	法 量(cm)	器 形	調整・成形	備 考
16	第1・2号住居跡南側斜面	器 台	口径 21.4	ラッパ状に大きく広がる器台受部である。粘土を貼りつけることにより口縁端部を内傾気味に拡張している。口縁端部外面の3か所に逆U字形の凸帯を貼りつけ、刻目文を施している。	外面 ナデ，ヘラ磨き。 内面 ヘラ磨き。 口縁端部外面に斜格子文を施す。	色調 橙褐色 胎土 密 焼成 良
17	第1・2号住居跡南側斜面	高 坏	口径 25.8	坏部は，中位で稜を有して屈曲し，口縁部は外湾気味にひらき，口縁端部は平たくおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
18	第1・2号住居跡南西斜面土器だまり	鉢形土器	口径 24.5	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たくおさめる。口縁部と胴部接合部分に内外面とも稜を有する。	外面 口縁部及び屈曲部ナデ。以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
19	第1・2号住居跡南西斜面土器だまり	甕形土器	口径 13.8	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たくおさめる。屈曲部内側に稜を有する。	外面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ハケ目 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
20	第1・2号住居跡南西斜面土器だまり	甕形土器	口径 19.8	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや薄手となり平たくおさめる。	外面 口縁部ハケ目。以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
21	第1・2号住居跡南西斜面土器だまり	甕形土器	口径 17.5	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たくおさめる。口縁屈曲部内側に稜を有する。	外面 ハケ目。 内面 口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調 橙褐色 胎土 やや密 焼成 良 口縁部，胴部にスス附着。
22	第1・2号住居跡南西斜面土器だまり	甕形土器	口径 19.4	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや薄手となり平たくおさめる。口縁屈曲部内側に稜を有する。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。 口縁直下にクシ歯状工具による刺突文を有する。	色調 外面 橙褐色 内面 淡黒褐色 胎土 密 焼成 良

番 号	出土位置	器 種	法 量(cm)	器 形	調整・成形	備 考
23	第1・2号住居跡 南西斜面 土器だまり	甕形土器	口径 16.2	口縁部は「く」の字状にゆるやかに外反し、端部は平たくおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
24	第1・2号住居跡 南西斜面 土器だまり	不 明	底径 4.8	平底の底部である。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調 外面 淡橙褐色 内面 淡褐色 胎土 やや密 焼成 良
25	第1・2号住居跡 南西斜面 土器だまり	不 明	底径 3.3	平底の底部で胴部は丸みをもつ。	外面 ハケ目。 内面 ヘラ削り。	色調 外面 赤褐色 内面 黒褐色 胎土 やや粗 焼成 良
26	第1・2号住居跡 南西斜面 土器だまり	器 台		ゆるやかに受部へ向けやや器厚を減じて移行する器台の筒部である。	外面 ハケ目。 内面 ハケ目後ナデ。 5方向からの透かしが施されている。	色調 外面 赤褐色 外面 暗赤褐色 胎土 密 焼成 良
27	第3号住居跡内	高 坏		わずかに内湾する坏部からゆるやかに立ち上がる口縁部をもち、やや尖り気味におさめる。	外面、内面ともナデ。	色調 外面 橙褐色 内面 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 良
28	第3号住居跡埋土中	甕形土器	口径 16.0	口縁部は「く」の字状に大きく外反し、端部は丸みをもっている。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面 口縁部及び屈曲部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
29	第3号住居跡埋土中	高 坏		高坏の脚柱部である。	外面 ハケ目後ヘラ磨き。 内面 ナデ。 脚の4方向に丸い透かしを施す。	色調 外面 橙褐色 内面 赤褐色 胎土 密 焼成 良
30	第3号住居跡西側斜面	甕形土器		口縁部は「く」の字状に強く反る。全体に薄く仕上げている。	ナデ。	色調 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 軟

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
31	第5号住居跡内	鉢形土器		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに器厚を減じつつ平たくおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。 口縁直下にヘラ状工具による「ノ」の字文を有する。	色調 赤褐色 外面 内面 暗黄褐色 胎土 密 焼成 良
32	第5号住居跡内	鉢形土器		口縁部はゆるやかに外反し、端部は尖り気味である。	外面 ナデ、ヘラ磨き。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 橙褐色 胎土 密 焼成 良
33	第5号住居跡内	不明		平底の底部である。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調 淡橙褐色 胎土 密 焼成 良
34	第5・6号住居跡南側地山面	甕形土器		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は器厚を減じつつ平たくおさめる。	外面 ハケ目。 内面 口縁部及び屈曲部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 淡橙褐色 外面 内面 褐色 胎土 密 焼成 良
35	第5・6号住居跡南側地山面	甕形土器		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は摘んで仕上げ平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ。以下ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁直下に刺突文を有する。	色調 淡褐色 外面 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 良
36	第5・6号住居跡南側地山面	甕形土器		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 橙褐色 外面 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 良
37	第5・6号住居跡南側地山面	甕形土器		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 口縁部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	色調 橙褐色 外面 内面 褐色 胎土 やや密 焼成 良
38	第5・6号住居跡南側地山面	甕形土器	口径 17.2	口縁部は「く」の字状に外反し、わずかに器厚を減じつつ端部は摘んで仕上げている。	外面 ナデ。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。 口縁直下に刺突文を有する。	色調 明橙褐色 胎土 やや密 焼成 良
39	第7号住居跡内	鉢形土器	口径 17.3	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに丸みをもつ。	外面 口縁部ナデ'。以下ハケ目。 内面 口縁部ナデ。以下ヘラ削り。	色調 暗褐色 胎土 密 焼成 良

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・整形	備考
40	第7号住居跡内	甕形土器		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや丸みをもつ。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 外面 淡褐色 内面 暗黄褐色 胎土 密 焼成 良
41	第7号住居跡内	不明		口縁端部は丸くおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 外面 橙褐色 内面 暗褐色 胎土 密 焼成 良
42	第7号住居跡内	不明		口縁は約1/2の部分でやや内側に角度を傾けて立つ。端部は平たくおさめる。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良 口縁端部にスス附着。
43	第7号住居跡内	不明	底径 6.7	平底の底部をもち、胴長はやや丸みをもつて立ち上がる。	外面, 内面ともハケ目。	色調 外面 暗赤褐色 内面 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
44	第7号住居跡内	不明	底径 4.6	底は指で押さえて凹底をしている。胴部は丸みをもつものと思われる。	外面 ハケ目。 内面 ヘラ削り。	色調 暗赤褐色 胎土 密 焼成 良
45	第7号住居跡内	不明		平底の底部をもつ。	外面, 内面ともヘラ磨き。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
46	第7号住居跡内	不明	底径 4.8	やや厚手となる平底の底部である。	外面 ハケ目。 内面 ヘラ削り。	色調 外面 暗褐色 内面 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良
47	第1号土壙内	壺形土器	口径 29.4 胴部最大径 33.6 器高 45.6 底径 10.0	口縁部はラッパ状に大きく開き、端部でほぼ水平になる。口縁端部は斜め下方へ下垂する。胴部最大径は中位よりやや下にある。	外面 ヘラ磨き。胴部下 半ヘラ削り後ヘラ ナデ。 内面 頸部ヘラ磨き。以 下ヘラナデ。 口縁端部外面に鋸歯文を 施す。頸部に2段の断面 三角形の凸帯をもつ。	色調 淡褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟 底部に黒斑。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
48	第1号土壇内	不明	底径 7.1	平底の底部をもつ。	外面 ヘラ磨き。 内面 ヘラナデ。	色調 淡褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟
49	第1号土壇内	不明	底径 4.7	平底の底部をもち、 やや内湾気味に立ち 上がる胴部をもつ。	外面 ハケ目後ナデ。 内面 ハケ目。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良
50	第1号土壇内	不明	底径 4.4	指で押さえ凹底とし ている。胴部から底 部へゆるやかにくび れながら移行する。 胴部は直線的に立ち 上がる。	外面 ハケ目。底部はハ ケ目後ナデ。 内面 ハケ目。	色調 暗褐色 胎土 やや密 焼成 良
51	第1号土壇内	不明		凹底の底部をもつ。 胴部から底部の境は 「く」の字状にくび れる。胴部は直線的 に立ち上がる。	外面 ハケ目。 内面 ハケ目後ヘラ磨 き。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良
52	第1号土壇内	不明	底径 4.3	凹底の底部をもつ。	外面 ヘラナデ。 内面 磨滅により不明。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良 外面に黒斑。
53	表土中	甕形土器	口径 22.5	口縁部はほぼ直角に 外反し、端部は上下 に肥厚させ中央部分 に一条の凹線を有す る。	外面 口縁部ナデ。以下 ハケ目。 内面 ハケ目後ナデ。	色調 淡黄褐 色 胎土 密 焼成 やや軟
54	表土中	壺形土器		口縁部に向かってゆる やかに外反する頸 部である。断面三角 形の凸帯を4条有 し、さらにこれと直 交する2条の凸帯を 上から貼りつけてい る。口縁部に近い部 分の内側に凸帯をも つ。	外面、内面ともナデ。	色調 淡褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟
55	第2号土壇内	甕形土器	口径 12.5	口縁部は「く」の字 状に外反し、端部は 器厚を減じつつ丸く おさめる。胴部はよ く張る。	外面 口縁部ナデ。以下 ハケ目後ナデ。 内面 ヘラ磨き。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良

4. ま と め

調査の結果、本遺跡は弥生時代の集落跡であることが確認された。従来、本遺跡のある丘陵は、城跡と考えられていたが、今回調査した範囲においては、城跡に関係した遺物及び遺構は一切検出されなかった。

本遺物からは、7軒（建て替え分も含む。）の住居跡及び3基の土壙を検出した。これらの遺構は、それぞれ2つの異なる尾根に分布しており、第1号住居跡～第6号住居跡と第7号住居跡のある地域に分かれている。以下第1号住居跡～第6号住居跡のある地域をA区、第7号住居跡のある地域をB区として若干の考察を加え、まとめとしたい。

まず、住居跡の営まれた時期及び集落の規模について見てみると、本遺跡から出土した土器は、弥生時代中期と弥生時代後期の特徴を持つものに分類でき、集落跡に関係すると考えられる土器は、すべて弥生時代後期のものであった。また、これを、A区、B区にわけて整理してみると、A区では、第2号住居跡が上深川Ⅱ式の土器を伴い、第1号住居跡、第3号住居跡、第5号住居跡は、上深川Ⅲ式の土器を伴っている。なお、第1号住居跡と第2号住居跡については、壁の方向がほぼ一致しており、平面プランも類似すると推定されることから、さほど時期的なへだたりはないものと思われる。第4号住居跡については、遺物が出土していないため時期を明確にしがたいが、その位置関係から、少なくとも第5号住居跡と同時に存在していたとは考えられず、第5・6号住居跡より先行するかあるいは後出するものと思われる。以上のことから、A区においては、まず第2号住居跡が営まれ、続いて第1号住居跡、第3号住居跡、及び第4・5・6号住居跡のうち1軒が営まれていたと推定でき、集落の規模は、1軒～3軒程度であったといえよう。次に、B区においては、第7号住居跡が1軒のみ見つかっている。ただ、調査の範囲外であるためその詳細は不明であるが、第7号住居跡の南東側にやや広い空間が続いており、この範囲にも遺跡が広がっている可能性が考えられる。また、第7号住居跡内からは、上深川Ⅱ式の土器が出土しているが、これをA区の土器と比較してみると、口縁部接合部分の仕上げや肩部から胴部にかけての形態等において、やや古い特徴を有していると思われる。このことから、第7号住居跡は、A区の集落より若干先行する可能性が考えられる。また、本遺跡の西側の谷一帯には、永寿園遺跡や倉重植物公園遺跡等の弥生土器が出土する遺跡が数多く分布している。しかし、その調査例は少なく詳細には不明な点が多いが、そのうち時期のわかっているものに、本遺跡と同様の立地をとる倉重2号遺跡と白禿遺跡がある。これらの遺跡は、いずれも弥生時代後期に営まれており、この時期、本遺跡西側の谷地形を囲むようにして、数多くの集落が展開していた可能性が想像できる。

なお、本遺跡からは、弥生時代中期の特徴を持つ土器が出土しているが、この時期の土器は、本遺跡から東に延びる丘陵の位置する池田城跡の発掘調査の際にも出土しているほか、本遺跡の直下にある水田や、平成2年度発掘調査が行われた稗畑遺跡からも見つかっている。市域内においてこの時期の土器は、出土数が少なく、しかも単発的に見つかっていることが多いなかで、本遺跡周辺においては、一定の広がりを持って出土している点にこの地域の一つの特徴を示しているといえよう。

次に、出土した土器の点から本遺跡の特徴を考えてみると、高坏や器台が10個体分出土しており、市域内の他の遺跡と比較してその出土数が例外的に多いことがあげられる。これらの高坏及び器台は、第2号住居跡及び第1・2号住居跡南側の斜面から出土している。第1・2号住居跡南側の斜面より出土した土器には、すべて上深川Ⅱ式の特徴が認められ、その出土状況や周辺の遺構配置を考えると、第1・2号住居跡南側の斜面から出土した土器は、すべて第1・2号住居跡に伴う可能性が高い。また、A区において、上深川Ⅱ式の時期に伴う住居跡は、第2号住居跡だけであることから、これらの土器は、第2号住居跡に伴うものかあるいは極めて強い関係を有している可能性が考えられる。その場合、第2号住居跡に関係する高坏及び器台は、7個体分となる。一般に市域内の同様の遺跡においては、高坏や器台が集落全体でせいぜい1～2個体出土する程度であり、高坏や器台が、日用土器としてだけでなく祭祀にも使用されていたことを考え合わせた時、このように多くの高坏や器台を伴う第2号住居跡は、きわめて注目すべき特徴を有しているといえる。一方、第2号住居跡は、規模及び形状において、他の住居と比べて特に卓越する点は認められないが、本来、住居を造るのに適さない急斜面をあたかも意図的に選んだかのごとく造られており、その点においても奇異な感じを受ける。今回、開発範囲が遺跡の全域に及ばなかったため、この様な2号住居跡の性格についても明確にしえないが、ただ、本住居跡に近接する景観的に最も優れた丘陵頂上部平坦地を意識して造られた住居跡とすれば、前述した立地の特殊性も充分首肯できよう。この平

坦地は、今回の発掘調査の範囲外であったため、その性格については明確にしがたいが、いずれにしても一つの集落において10個体分の高坏及び器台の出土は希なことであり、本集落の特殊な役割を暗示していると考えられよう。

注

1. 五日市町誌編集委員会『五日市町誌』上巻 1974
広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』1990
2. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』1987
3. 注1に同じ
4. 広島市教育委員会『池田城跡発掘調査報告』1986
5. 1980年度、広島市教育委員会による試掘調査の際出土した。
6. 1991年度、財団法人広島市歴史科学教育事業団が発掘調査を実施した。

IV 倉重向山古墳

1. 調査概要

倉重向山古墳は、標高693mの極楽寺山から東南に派生する低丘陵の尾根上に位置する。墳頂部の標高は90m、付近の水田からの比高差は約60mである。この古墳からは、石内方面から八幡川の沖積平野、坪井、三宅方面の極楽寺山からの山麓緩斜面、さらに広島湾が一望のもとに見渡せ、晴れた日には遠く四国の山々までが見える大変眺望のよい場所に位置しているといえる。

本古墳は、調査前の原地形の概観から前方後円墳の可能性があると予測されたので、主体部、墳裾等を確認するためのトレンチを調査範囲である尾根の南側に設定した。その結果、埴輪等の遺物は出土しなかったものの、前方後円墳であることや、その規模、主体部の一部等を確認した。なお、本古墳は、土地所有者の御理解を得て開発区域から外し、緑地として保存することとなったため、調査終了後、トレンチは埋め戻した。

2. 遺構

(1) 墳丘

本古墳は、狭長な尾根の中程に位置し、地形的制約を受け尾根幅を最大限に利用している。後円部は尾根の先端に、前方部は尾根の最高所へ向かっている。規模は、全長38m、後円部径19.5m、くびれ部幅10.8m、後円部高3m（くびれ部基底部より）、前方部高2m（くびれ部基底部より）を測り、墳頂部には径約11mの平坦面がある。墳丘の主軸は、S31°Eで後円部径に比し幅の狭い形状を呈するといえる。また、前方部墳裾には石列及びそれに続く削平された平坦面が見られる。墳丘の表土直下は地山になっており、現況では盛土は確認できなかったため、基本的に地山の削り出しによる築造と考えられる。以下、後円部、くびれ部、前方部に分け、トレンチの状況を記していく。

後円部

墳裾を確認するため、墳頂部の平坦面端より墳丘軸に直交した幅0.7m、長さ11mのトレンチ(2)を設定した。10cm程度の表土層の下は砂礫まじりの淡黄褐色土層である。平坦面より標高が約3.6m下がったところに地山面の変換点があり、そのレベル（標高86.4m）が後述するくびれ部の墳裾のレベル（標高87.2m）と概ね合うことからこの部分をもって後円部の墳裾と考えることができる。なお、葺石、石列に使われたと思われる石は全く検出されなかった。しかし、表面観察によると、後円部北側には角礫の見られる部分がある。

くびれ部

当初、幅0.7m、長さ4mのトレンチ(T3)を設定したところ、石列と考えられる石が確認され、そこに段状の落ち込みが見られた。そこで、墳裾とくびれ部の検出、さらに、造り出し、周濠等の存在を確認するため、トレンチを東側に1.5m、南側に8m拡張した。堆積の状態は、上層は砂礫まじりの淡黄褐色土層で、下層は一部に炭化物が認められる黒褐色土であり、大量の拳大の角礫を含んでいる。この角礫を除去して検出された地山面は、前述した石列において急激に立ち上がっており、また、その石列からは地山を削り出して8mに及ぶ平坦面が外方に広がるため、この石列の部分が墳裾及び基底面と考えられる。地表より墳裾基底面までは深さ約0.9mである。石列は、トレンチ内において後円部に向けて緩やかに外反しており、広く平坦な面を縦長に据えた幅18~25cm、縦長25~36cmの大きな角礫（基底石）を一段配列している。基底石は、前方部からくびれ部に入る変換点から若干大きくなる傾向があり（変換点前の石は、幅18~25cm、縦長25cm）、また、地山面に対するその傾斜角は徐々に緩やかになるように設置されている（約55°~25°）。基底石上面には、小さな角礫が墳丘斜面に沿って積み上げられており、葺石状を呈する。なお、くびれ部平坦面では、拳より少し大きめの礫が敷かれている。これらは、トレンチの範囲を超えており、用途、性格については不明である。

前方部

前方部側面の墳裾を確認するため幅0.6m、長さ5.8mのトレンチ(T4)と幅0.5m、長さ6.3mのトレンチ(T5)を設定し、さらに、前方部正面の墳裾を確認するため、幅0.7m、長さ10.3

mのトレンチ（T6）を設定した。その結果、T4・5では、T3と同様に、地山が礫群直下で段状に落ち込み、それに続く削平された平坦面が検出された。これらの平坦面は、T3（標高87.19m）、T4（標高87.26m）、T5（標高87.33m）と前方部正面に向かって緩やかに高くなっている。T6では、前方部正面に傾斜角約65°、斜面長0.6mの段状遺構を検出した。この段は、地形観察からも、墓域を画するため尾根を切った溝の立ち上がりと考えられ、その下場からは、尾根の最高所に向かって約8m以上の平坦面が続いている。しかし、溝の反対側の立ち上がりは境界外にあると思われ、溝の幅については明らかにできなかった。表土の下は砂礫まじりの淡黄褐色土層である。段から東に向かって0.4～1.5mの範囲に少量ではあるが、くびれ部に比べて小さな角礫が検出されており、くびれ部からの石列が回っていた可能性がある。

（2）主体部

墳頂部平坦面のほぼ中心から南へ幅0.4m、長さ8.5mのトレンチ（T1）を設定し、主体部の存在を確認することに努めた。全体に、表土は浅く、10cm程度下から地山面を検出したが、一部に主体部と考えられる落ち込みを検出した。落ち込みは、幅2.7mを測り、両端から約15cm下で一度平らになり、幅約30cmの平らな面を形成したのち、再び落ち込んでいる。この二次墳の肩の部分には砂粒の少ない赤褐色粘質土が見られ、二次墳内の埋土を除去したところ、二次墳の肩から続く粘土層上面を確認した。この粘土層の面は、U字形を呈しているように観察され、その厚さは、粘土層端部で5～10cmである。この粘土層は、埋葬された木棺を被覆するための粘土と考えられる。また、土壌内部の埋土は外部と同じ砂礫まじりの淡黄褐色土であり、被覆粘土上部の墓壇埋土ではないかと思われる。このことから、主体部は、地山に掘り込まれた二重土壇であり、一次墳の正確な規模は不明であるが、墳丘規模から地山を長さ約6～7m、幅約2.3m、表土からの深さ約0.6～0.9m掘り込んでいると推定された。二次墳の規模は、南側赤褐色粘質土の検出状況から土壇の角と見られる変換部分であったことと、南北の赤褐色粘質土層がほぼ同じレベルから平行に検出されたことから、一次墳中央部をさらに幅約1.7m、深さ0.5～0.6m掘り込んでいると推定される。主軸方向は、墳丘主軸にほぼ直交しておりN13°Eである。

3. ま と め

倉重向山古墳は、全長38mの前方後円墳で後円部中心よりやや東に偏した位置に主体部を持っている。今回のトレンチ調査では、古墳に伴う出土遺物が検出されなかったため、立地、墳丘及び外表施設、内部主体の一部の調査結果しか得られず、本古墳についての総合的な判断には欠ける。以下、遺構のまとめと若干考えられることを述べ、まとめとしたい。

（1）墳丘築造

尾根の南側部分のみのトレンチ調査であったため、墳丘全体の築造過程は不明であるが、後円部・前方部とも現在の表土層直下に地山が現れるので、基本的には地山を削り出して墳形を整えているといえるであろう。特に、くびれ部において基底面を整えるため最大幅8mに及ぶ平坦面を削り出していることが注目された。また、その基底面の標高が尾根高所に向かう前方部正面に近づくにつれて次第に高くなっていることは、築造時の地形的制約があったため、旧地形を最大限利用し、労働量を最小限にとどめようとした結果であろう。段築成については不明であるが、くびれ部に検出した外表施設としての列石・葺石状遺構は、大きな角礫を使用して面を揃えて積まれており、非常にていねいに造られている。また、T3から浮いて出土した大量の角礫は、流出した葺石の可能性が高い。このことから、斜面のかなりの部分を葺石が覆っていたことが考えられる。したがって、前方部正面に検出された角礫を石列を考えれば、築造時には葺石、石列がくびれ部から前方部にかけて敷設されたものと思われる。しかし、後円部については明らかでないので今後の調査を待ちたい。前方部正面の整形は、尾根背後をカットする構築法をとり、全体の墳形として前方部の高さ、幅とも発達したものではなく、古式の前方後円墳の特徴を備えている。

（2）内部主体

墓壇は、墳頂部中心東側において、主軸が墳丘軸に直交し、地山から直接掘り込まれた二重土壇（6～7m×2.3m）となっている。埋葬主体は、砂粒の少ない赤褐色粘質土を使用した粘土槨であり、底面はU字形を呈しているため割竹形木棺を安置したと思われる。市内の粘土槨の例は、現在のところ道川第

1号古墳（5世紀代，3.5m×2.1m）しかなく，粘土床としても真亀第1号古墳（5世紀前半，4.7m×0.95m），権地古墳A主体（5世紀代，4.65m×2.7m）に見られるのみであり，極めて稀少であると考えられる。また，県内の割竹形木棺を持つ古墳は数多くあり，これらは4世紀末から5世紀代の築造といわれている。

（3）時 期

八幡川流域において確認されている前半期古墳は，後半期古墳比べて少なく，わずかに，円墳から短甲・金銅製の装飾品・鉄刀などが出土した城ノ下A地点遺跡，須恵器などが出土したといわれる高井古墳，5世紀後半～6世紀初頭と考えられている内行花文鏡片などが出土し，内部主体に組合式木棺を持つ11基の円墳・方墳が確認された月見城古墳群や，長大な（4m）割竹形木棺が埋納された竪穴式石室をもち，5世紀中頃の円墳と考えられる高砂古墳が知られているのみである。また，市内の前半期の前方後円墳は，太田川下流域東岸に，4世紀後半の築造と推定され，竪穴式石室から三国時代の吾作銘三角縁四神四獣鏡などを出土した全長約30mの中小田第1号古墳，埋葬主体は不明であるが，4世紀末～5世紀初頭の築造と比定され，後円部に川原石による葺石が見られる全長約40mの弘住第1号古墳があり，太田川西岸には，竪穴式石室から三国時代の環状乳画文帯神獸鏡が出土した全長約42mの宇那木山第2号古墳，3基の竪穴式石室から後漢代の内行花文鏡片などを出土した全長約30mの神宮山第1号古墳があり，いずれも4世紀後半の築造といわれている。なお，帆立貝式古墳では，5世紀前半～中葉の築造で，長大な（4.7m）割竹形木棺から鉄剣・小玉などを出土した全長24.6mの虹山古墳などがある。このように，八幡川流域における前半期古墳には，規模及び前方後円墳という形態の点から本古墳に匹敵するようなものはなく，この地域では最古級の古墳であることを想定できる。また，市域内で現在知られている前方後円墳は，いずれも本古墳と同様に自らの治める範囲を見下ろす丘陵上か丘陵端部に位置しており，墳形も前方部があまり発達したものではない。しかし，本古墳が外表施設として列石・葺石を持ち，主体部が粘土槨であるに対し，4世紀後半の築造といわれる中小田第1号古墳，神宮山第1号古墳，宇那木山第2号古墳には葺石が確認されておらず，主体部が竪穴式石室であることと，粘土槨を主体部に持つ近辺のいずれも概ね5世紀代の築造であることを考え合わせると，本古墳の築造時期は，中小田第1号古墳，神宮山第1号古墳，宇那木山第2号古墳よりは後出し，葺石を持つ弘住第1号古墳に近接，あるいはそれに続く時期が考えられるであろう。

（4）立地及び被葬者

倉重向山古墳の立地する丘陵先端直下には，政治・経済・文化の伝播ルートとしての古代山陽道が通っていたと言われており，また，八幡川，石内川流域には条理遺構が見られ，この地域が古くから開発されていた広い平野であったことを想起させる。さらに，広島湾の島々は，古代には海部郷と呼ばれ，小さな漁村が点在していたと思われる。このような交通の要衝や生産基盤となる地域を一望のもとに見下ろせる優れた丘陵上を選んで造られた本古墳の被葬者は，立地の点で市域内の他の前方後円墳の被葬者と基本的に共通した性格を持つものと想定できるが，古墳から眺望できる地域を考慮すると，より海を意識していたのではないかと思われる。そして，そのことは，本古墳の被葬者が，八幡川下流域のみならず，広島湾の海上支配権をも制していた首長であったことを推察させるのではなかろうか。

注

1. 広島市教育委員会『高陽台遺跡群発掘調査報告』1982
2. 広島市教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
3. 広島市教育委員会『九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告』1984
4. 中田 昭『虹山古墳発掘調査報告』1989
5. 1990年度に当事業団が発掘調査を実施した。
6. 五日市町誌編集委員会『五日市誌』上巻1974
7. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』1987
8. 河瀬正利「原始・古代のくらしと文化」廿日市町『廿日市町史』通史編（上）1988
9. 広島市教育委員会『中小田古墳群』1982
10. 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983
11. 8に同じ

中摩浩太郎他「神宮山1号古墳・3号古墳の測量調査成果報告」『続トレンチ』第6巻第4号広島
大学文学部考古学教室続トレンチ編集委員会 1986

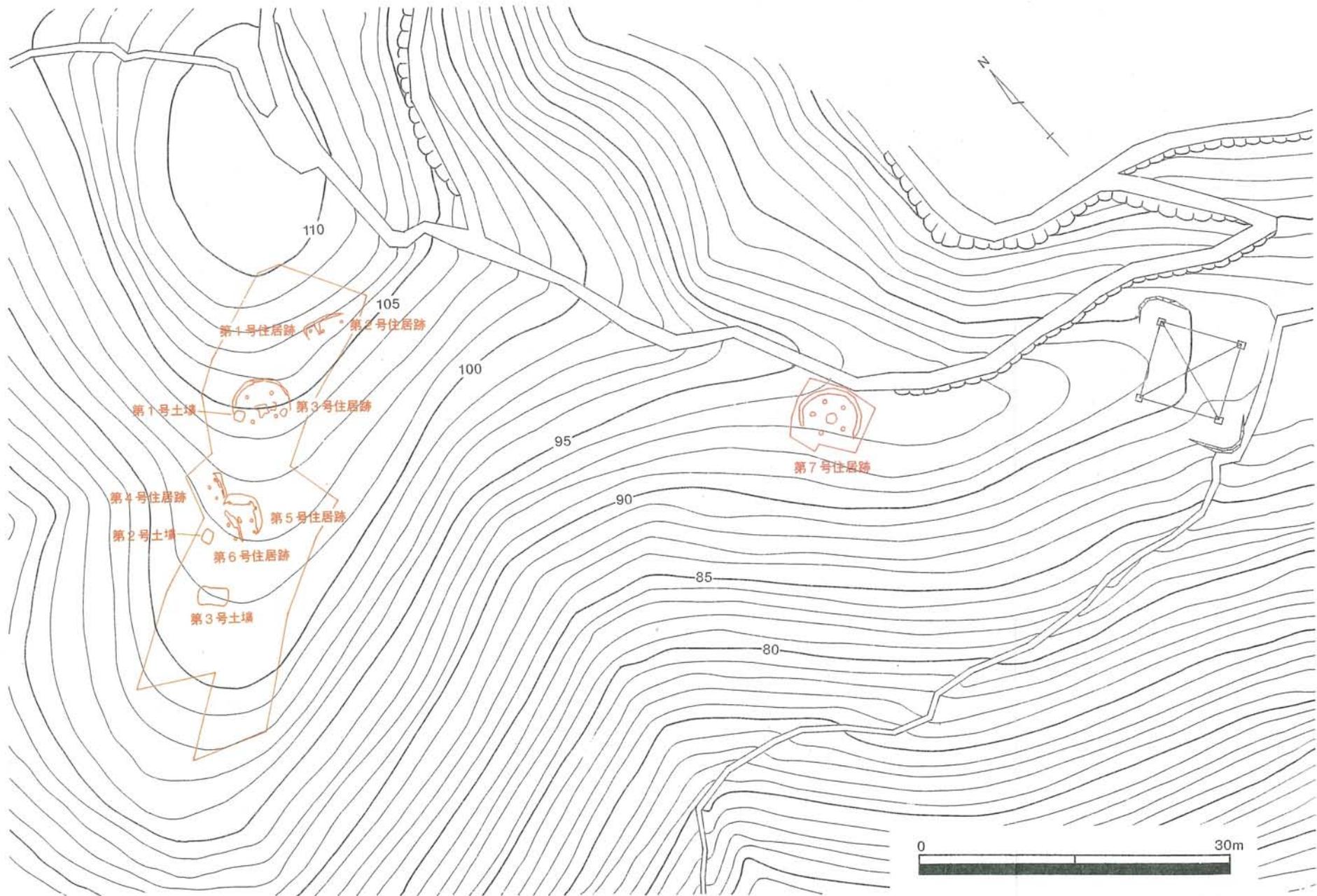
12. 4に同じ

13. 4に同じ

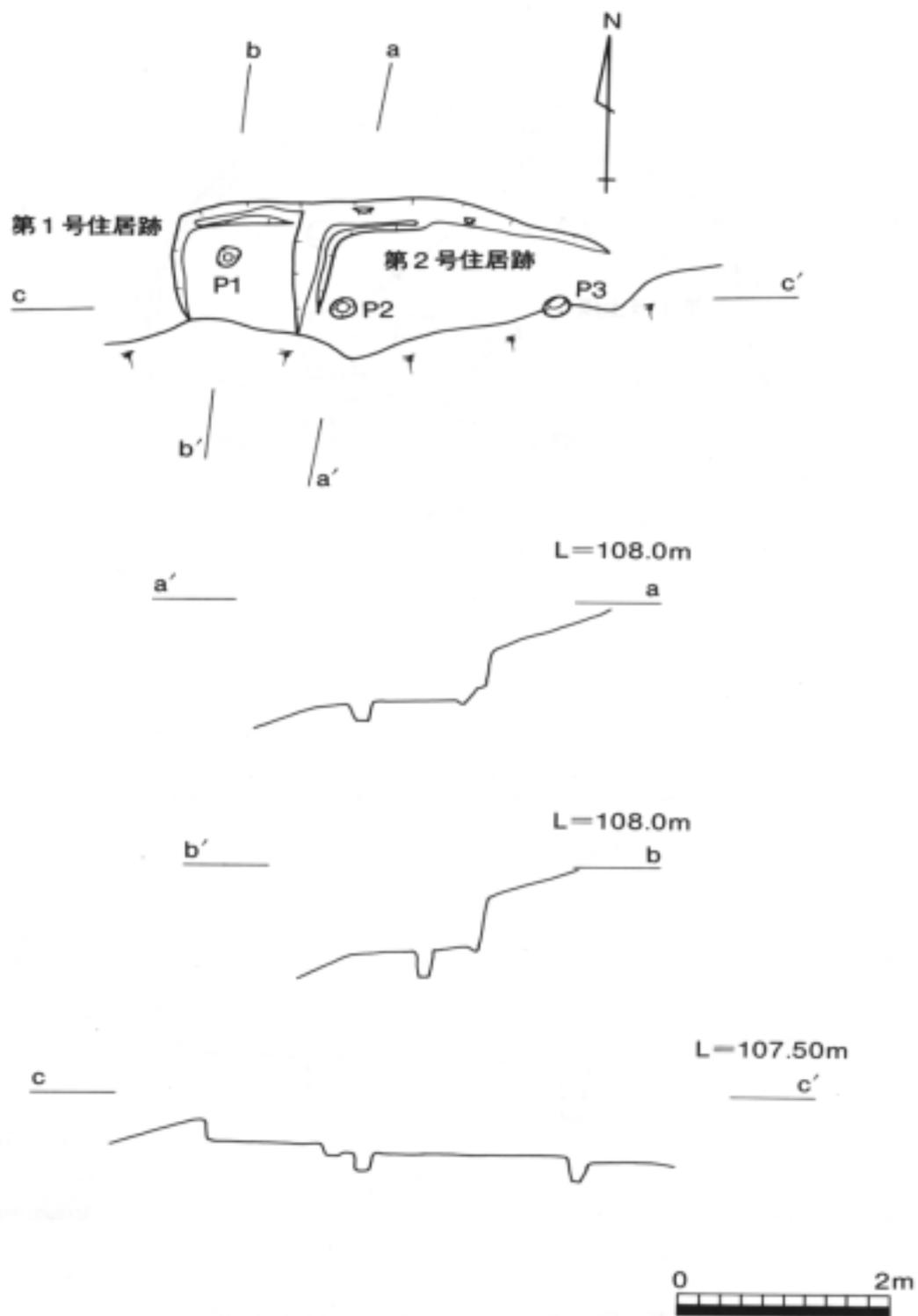
14. 広島県『広島県史』原始・古代編 1979

15. 14に同じ

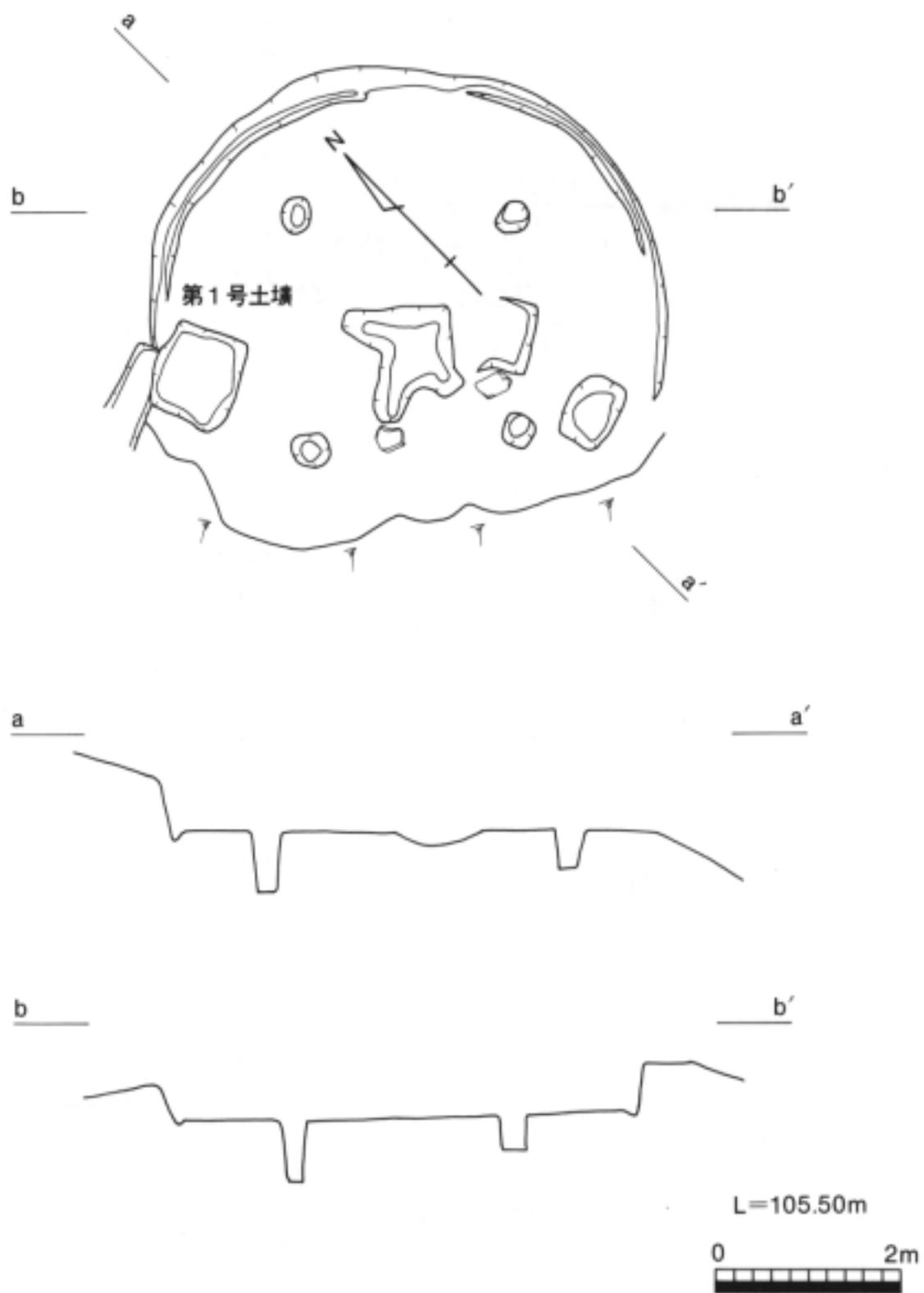
16. 14に同じ



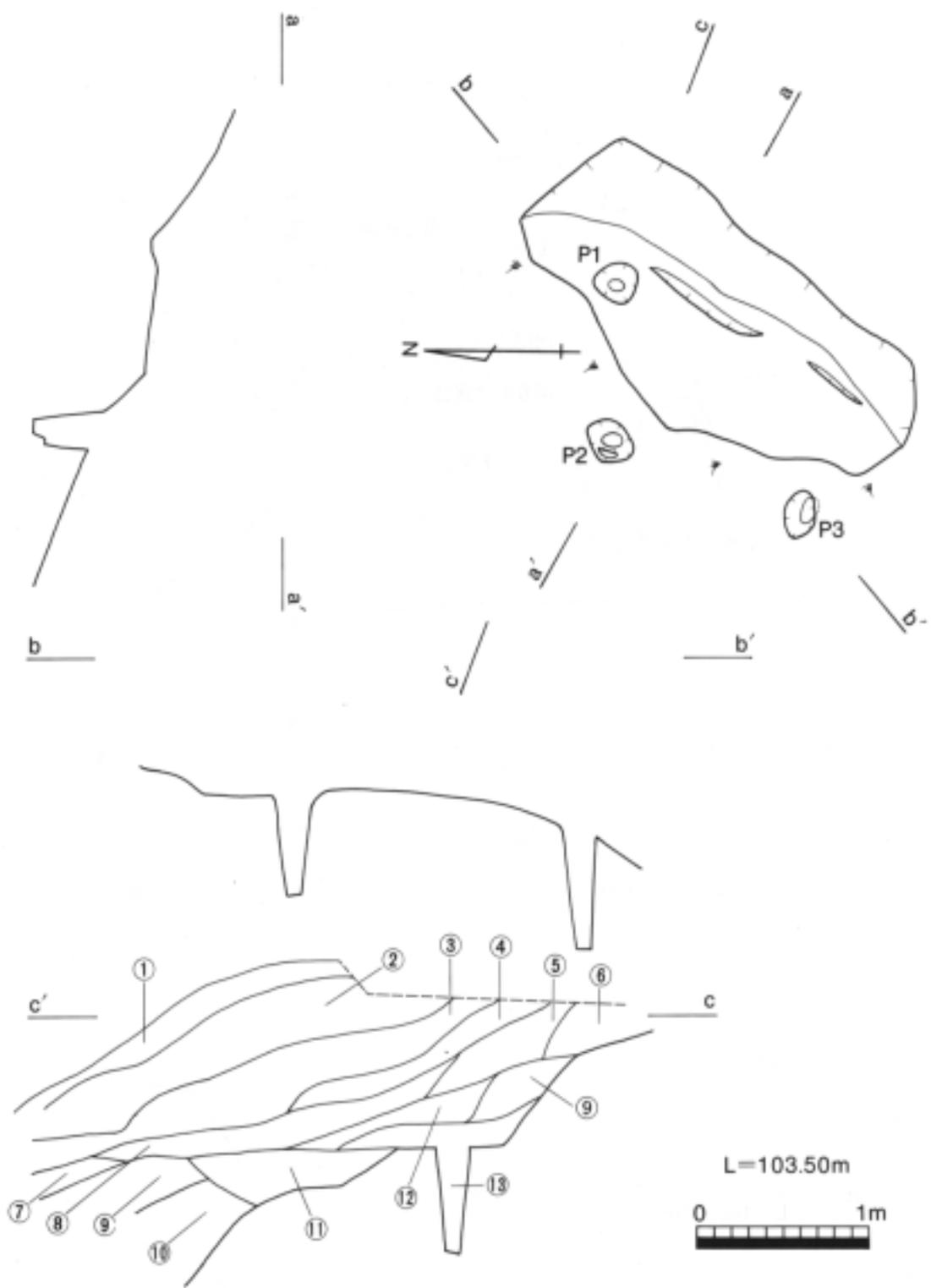
第4圖 倉重向山遺跡遺構配置圖



第5图 倉重向山遺跡第1・2号住居跡实测图

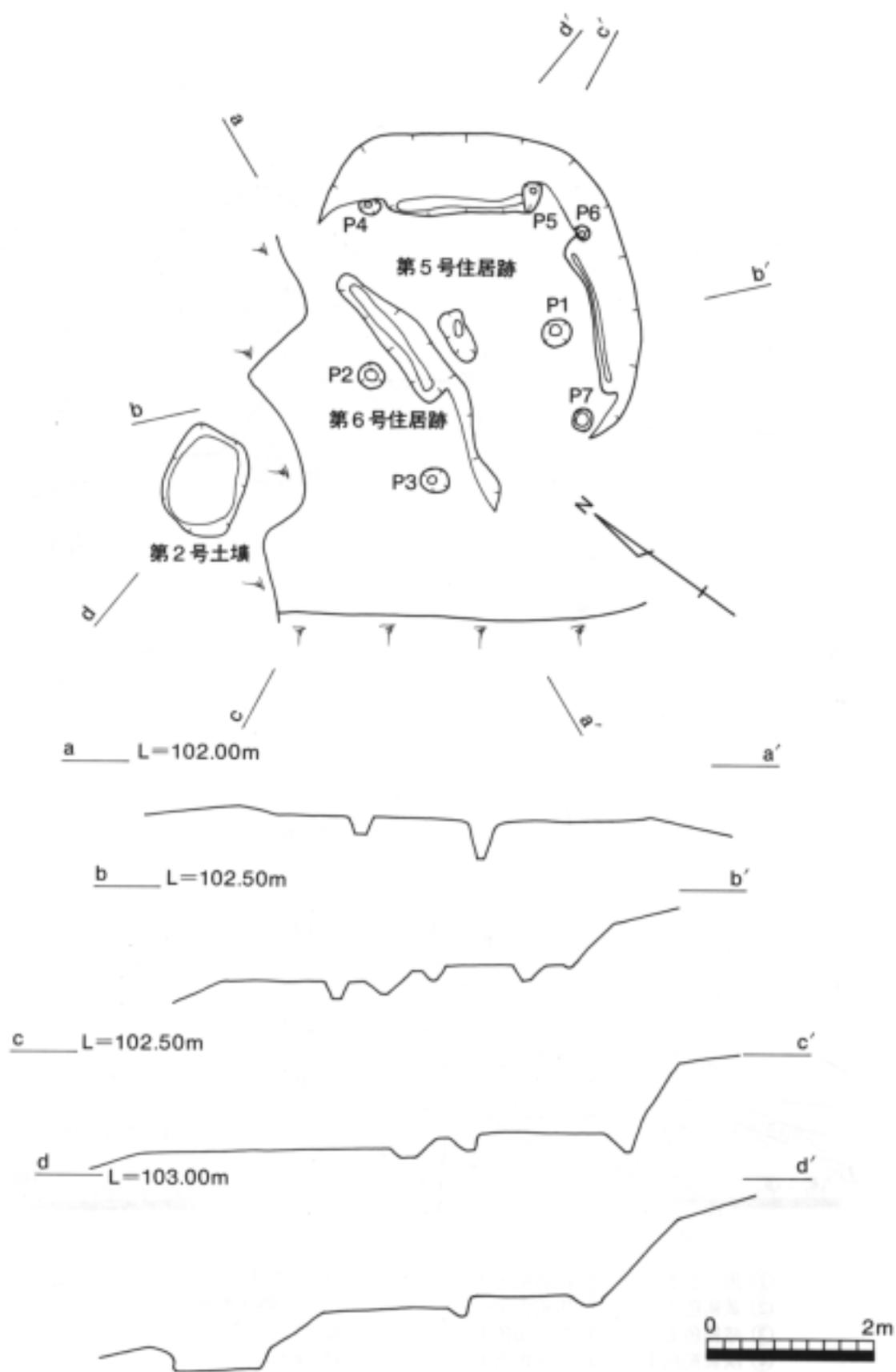


第6图 倉重向山遺跡第3号住居跡実測図

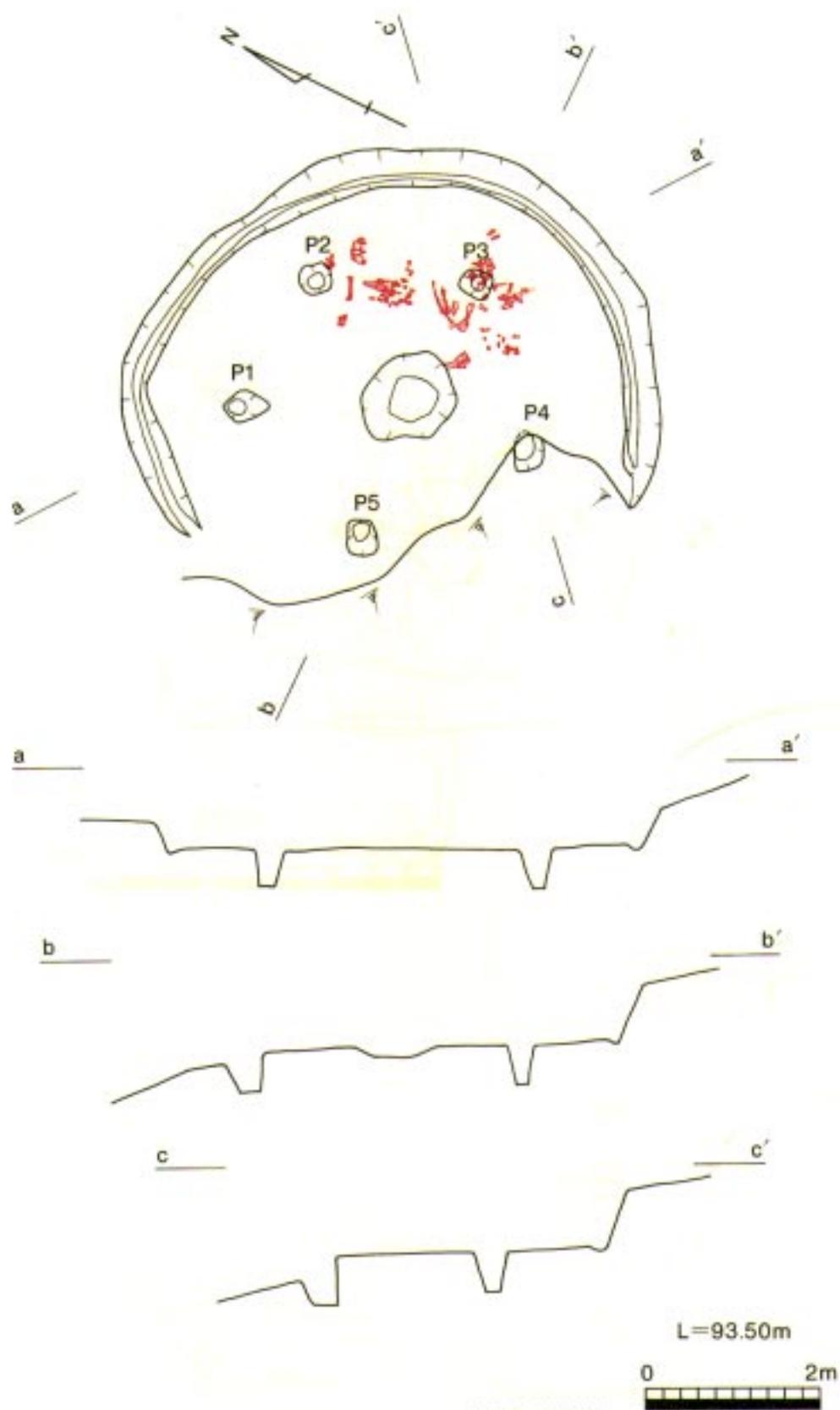


- | | | |
|---------|---------------|----------------------------|
| ① 黒色土 | ⑥ 淡黄褐色土 (砂粒含) | ⑪ 淡黒褐色土 (1~2cmの角礫を多く含む整地層) |
| ② 黄褐色土 | ⑦ 黒褐色土 | ⑫ 黒褐色土 |
| ③ 暗褐色土 | ⑧ 暗赤褐色土 | ⑬ 淡黒褐色土 (小砂粒含) |
| ④ 淡黄褐色土 | ⑨ 暗黄褐色土 | |
| ⑤ 淡赤褐色土 | ⑩ 赤褐色土 | |

第7図 倉重向山遺跡第4号住居跡実測図

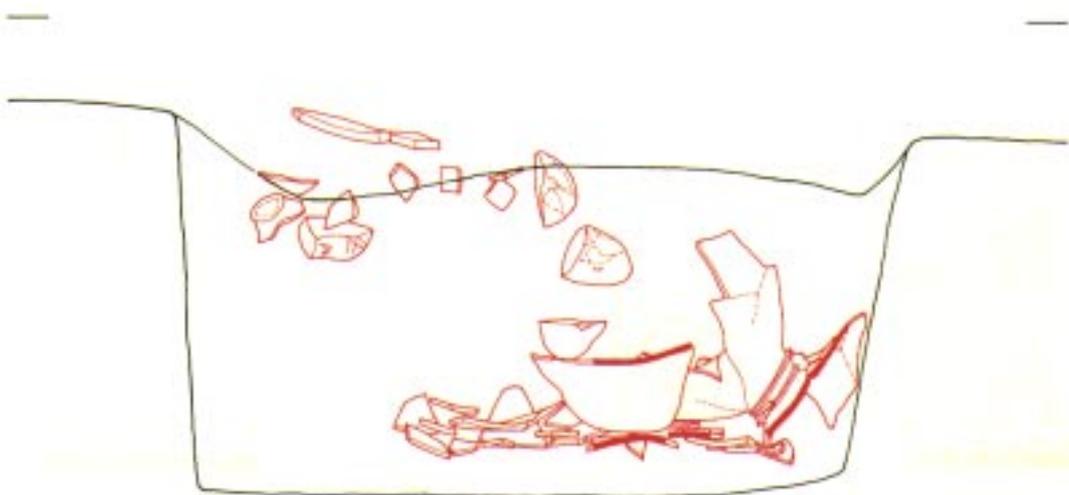
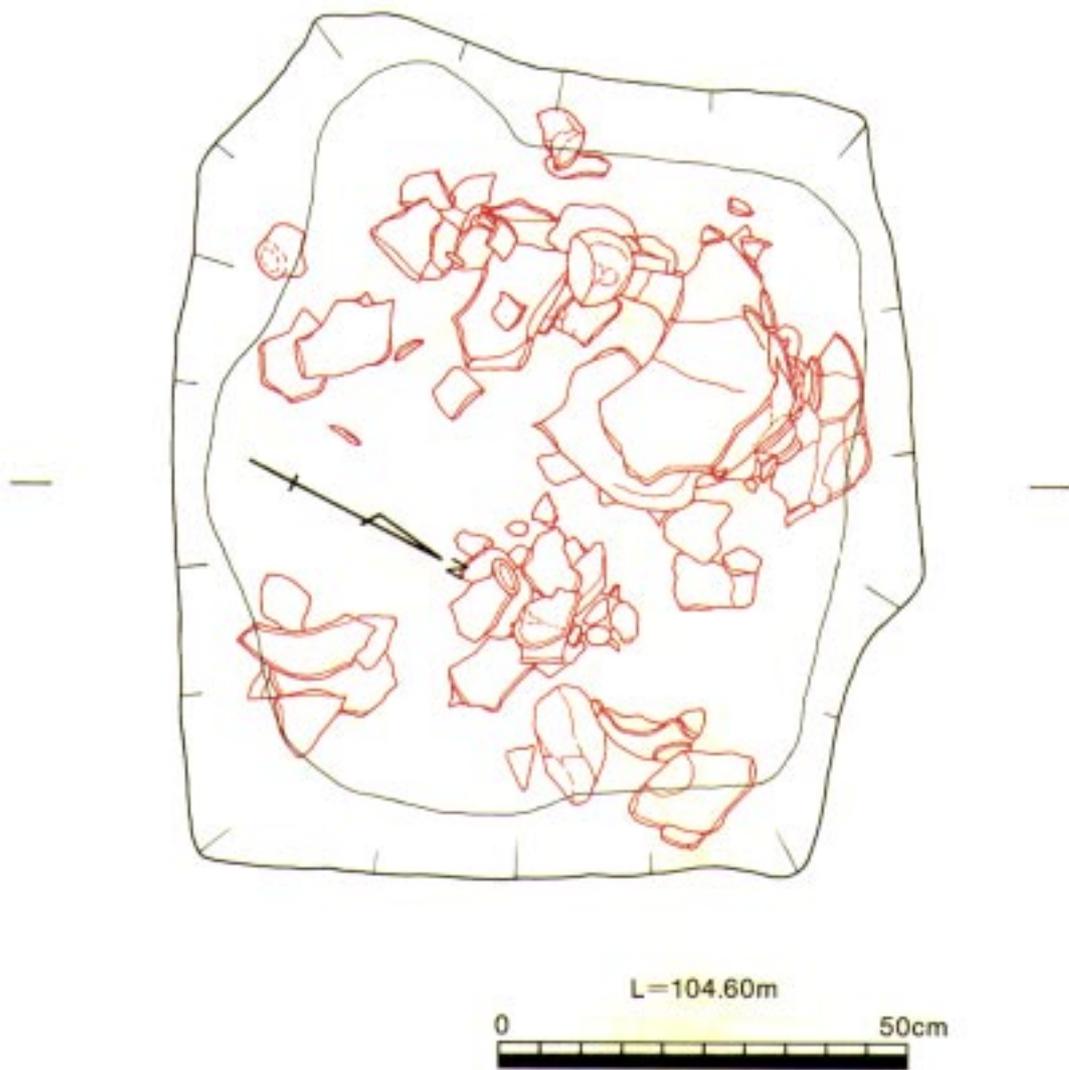


第8图 倉重向山遺跡第5・6号住居跡实测图

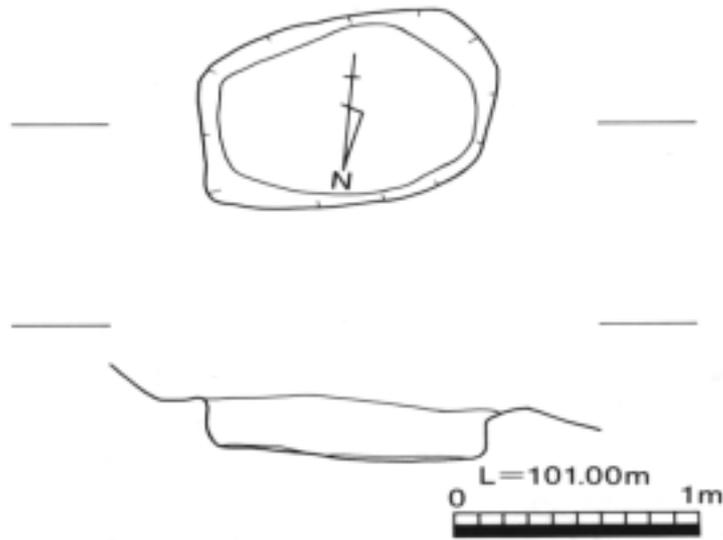


赤木目は炭化材

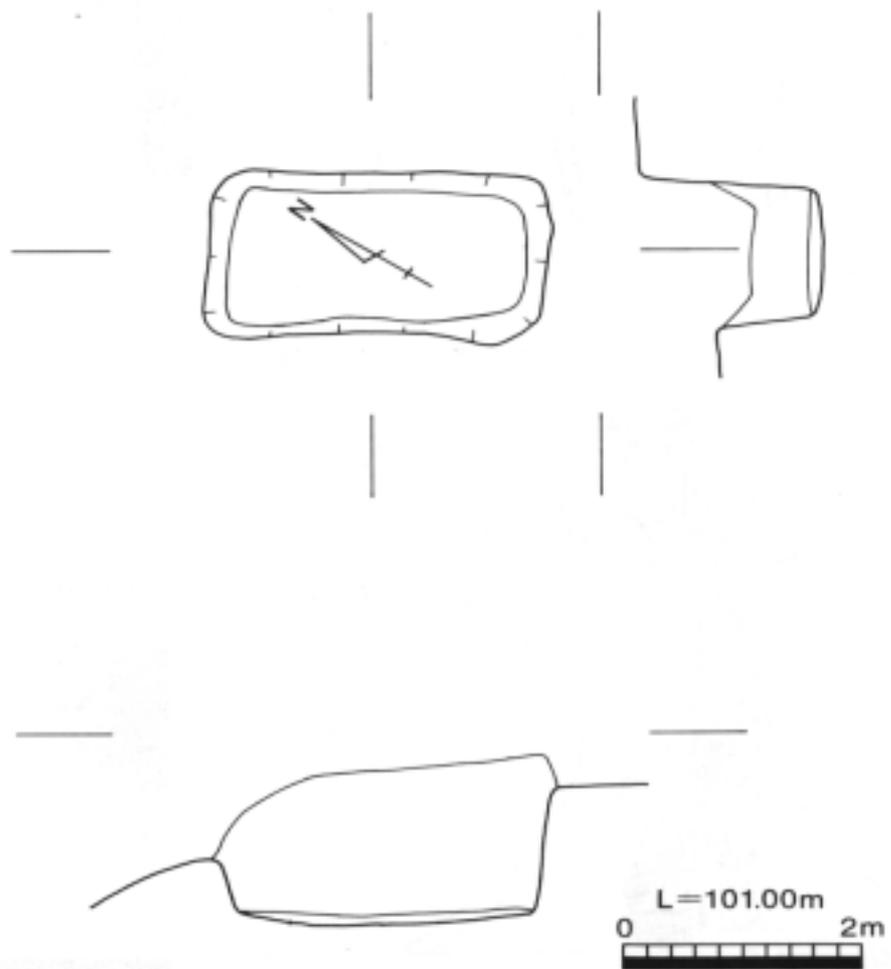
第9図 倉重向山遺跡第7号住居跡夾測図



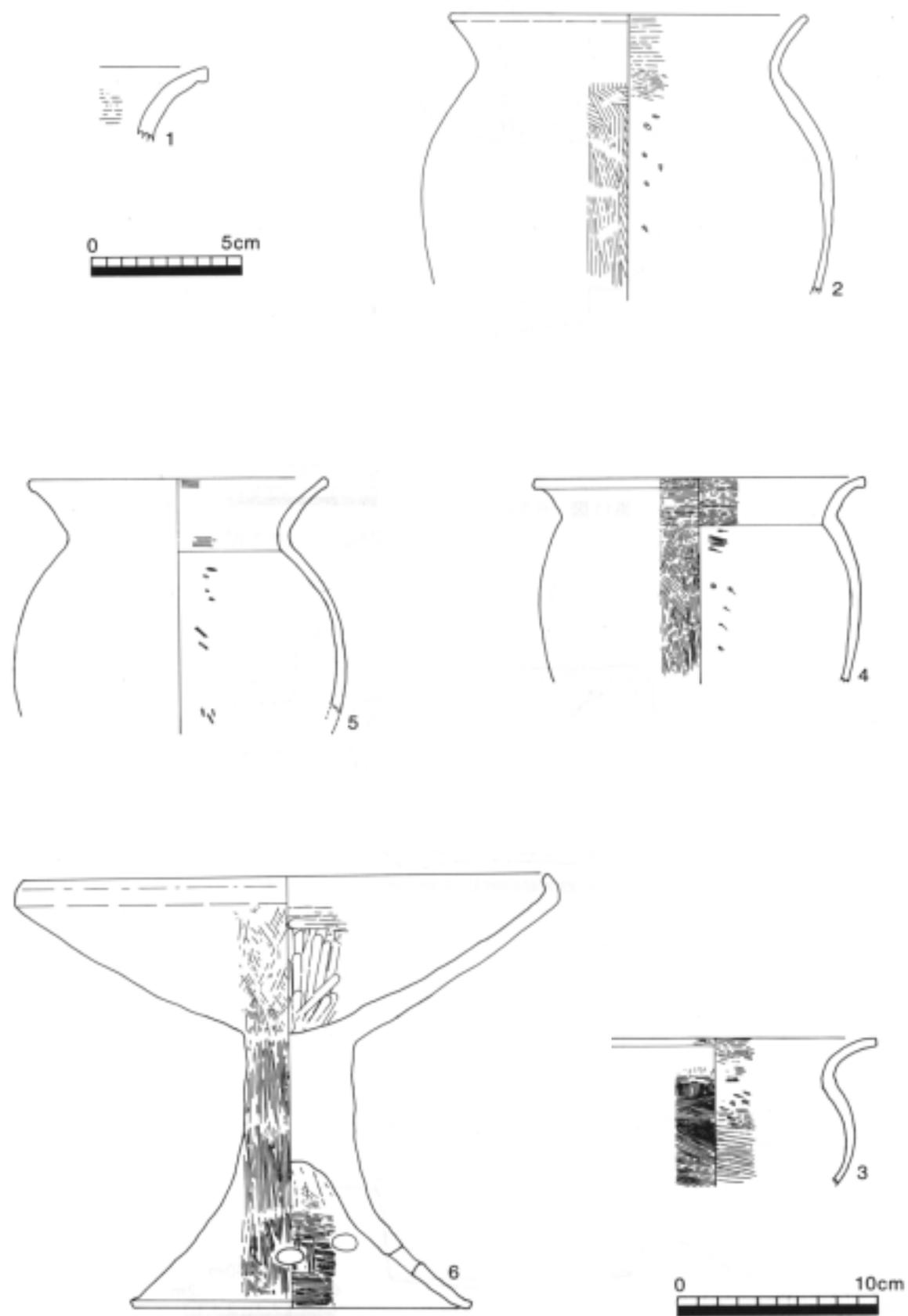
第10图 第1号土壤内遺物出土状況



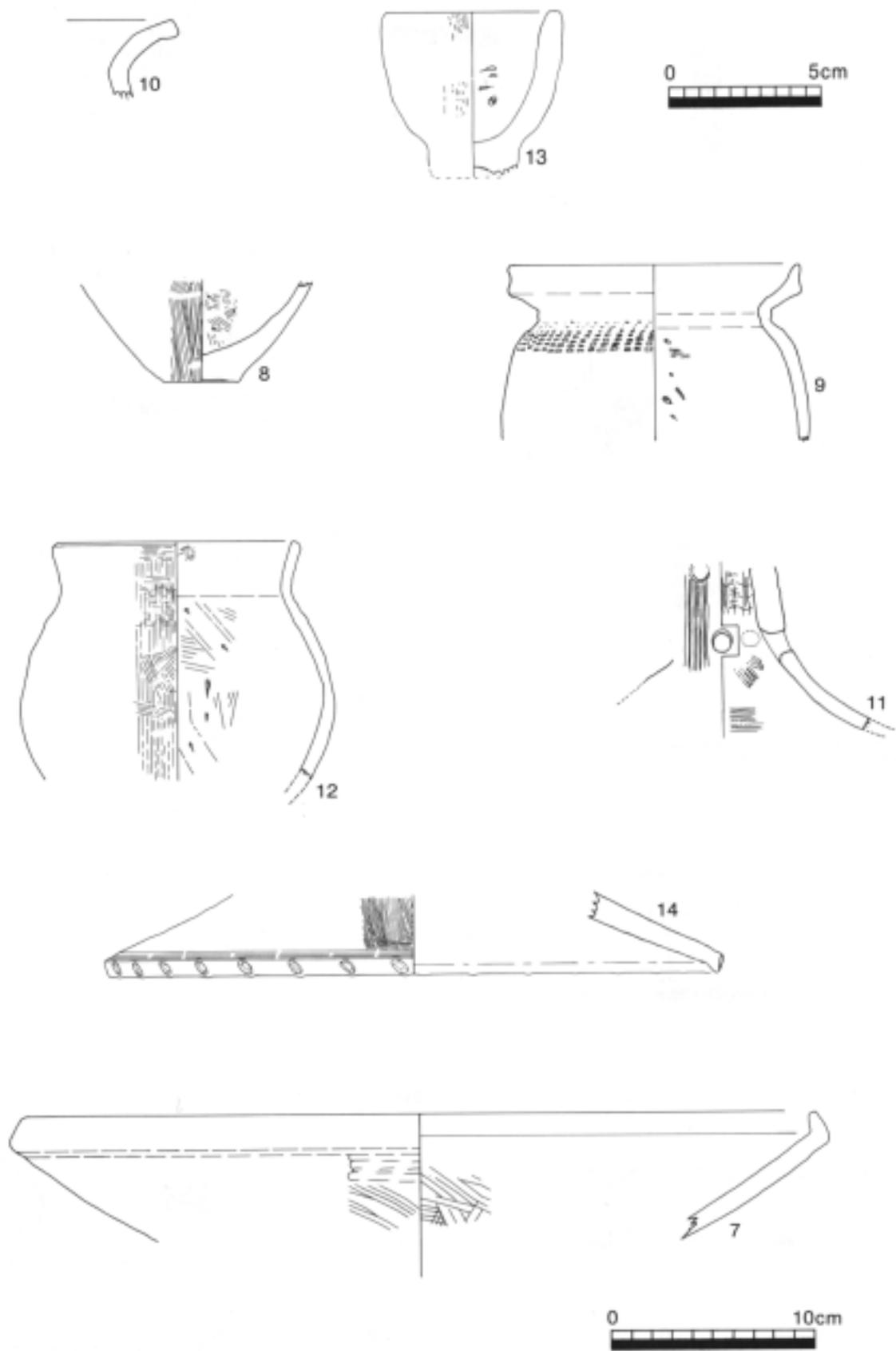
第11图 倉重向山遺跡第2号土坑実測図



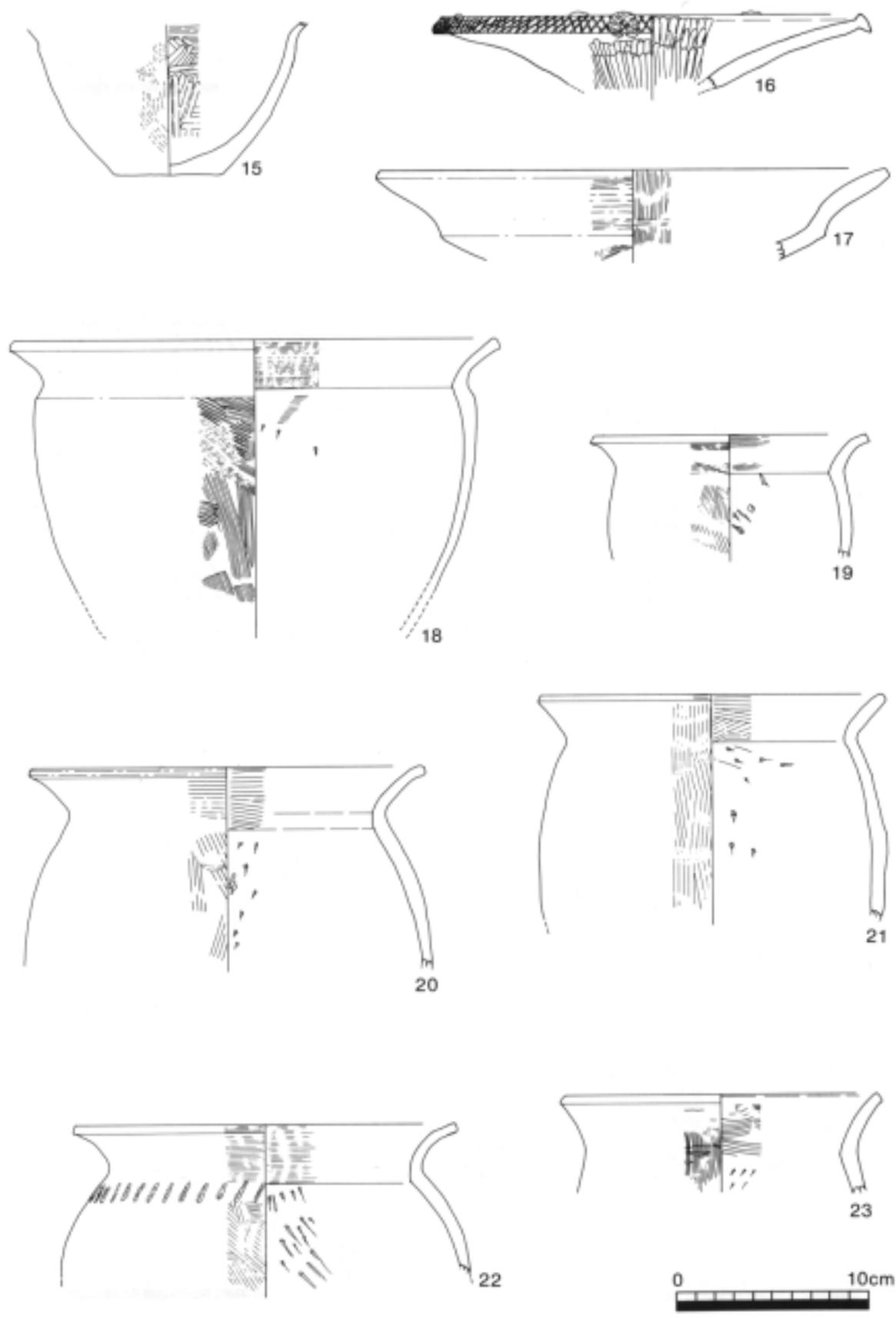
第12图 倉重向山遺跡第3号土坑実測図



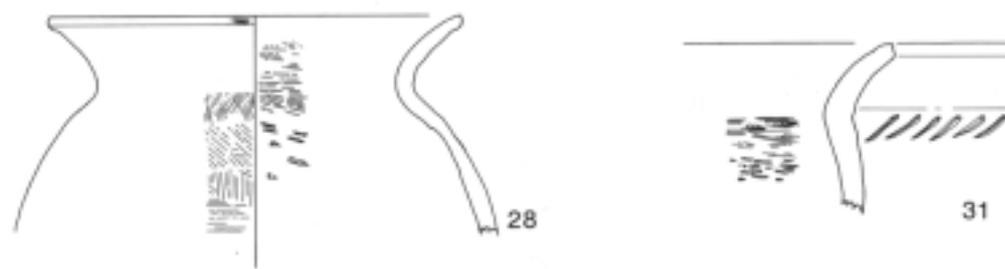
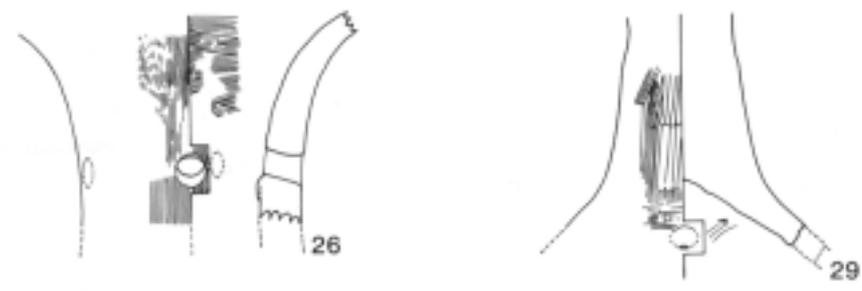
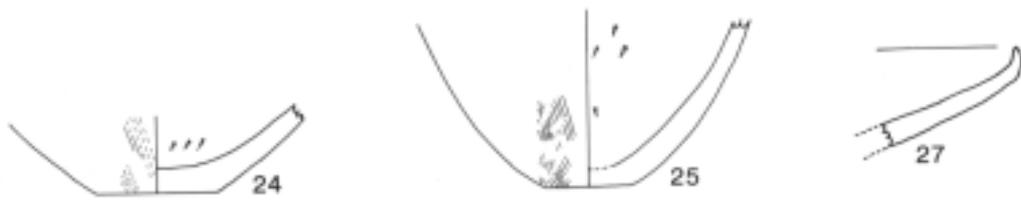
第13圖 倉重向山遺跡出土土器実測図(1)



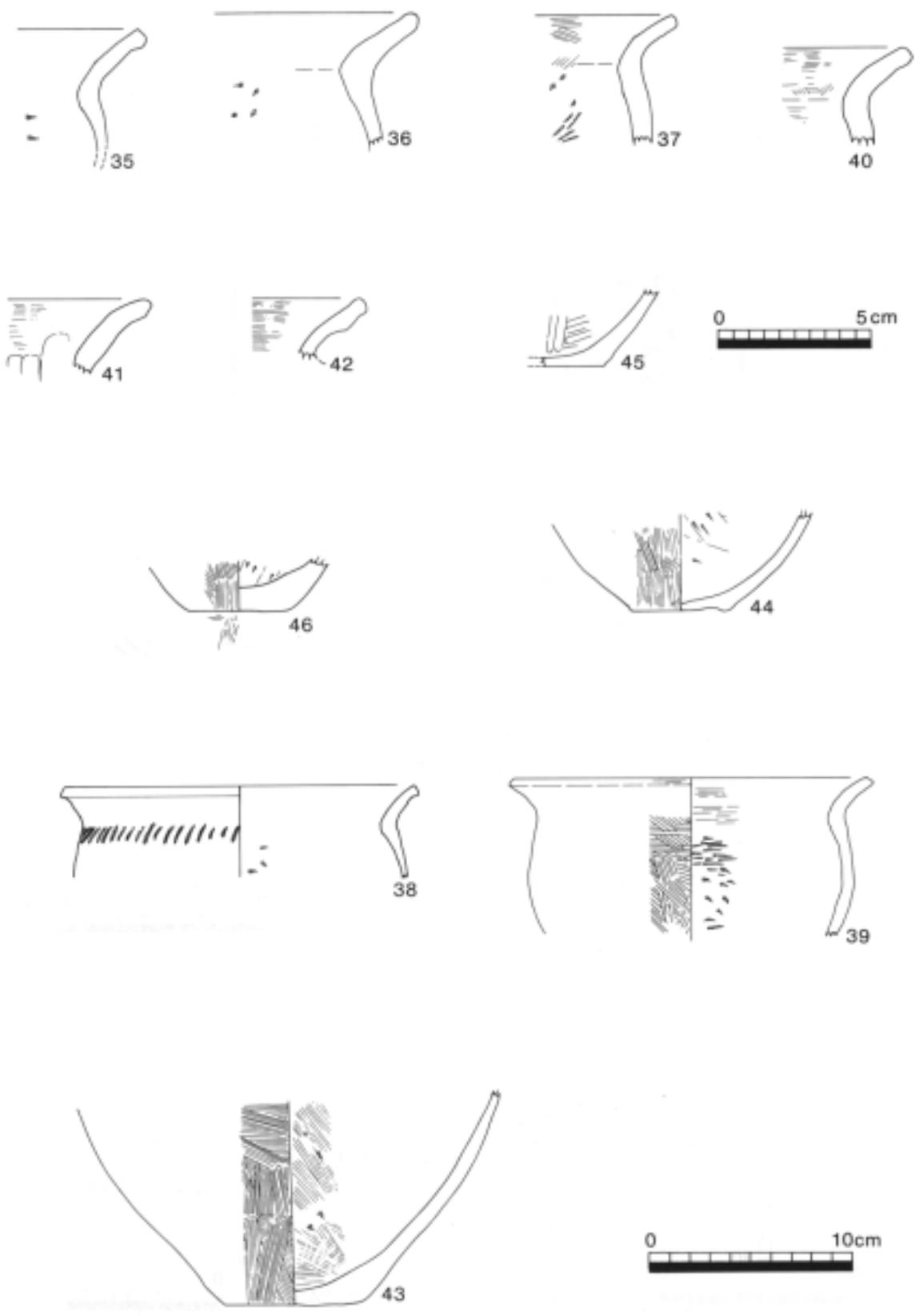
第14图 倉重向山遺跡出土土器実測図(2)



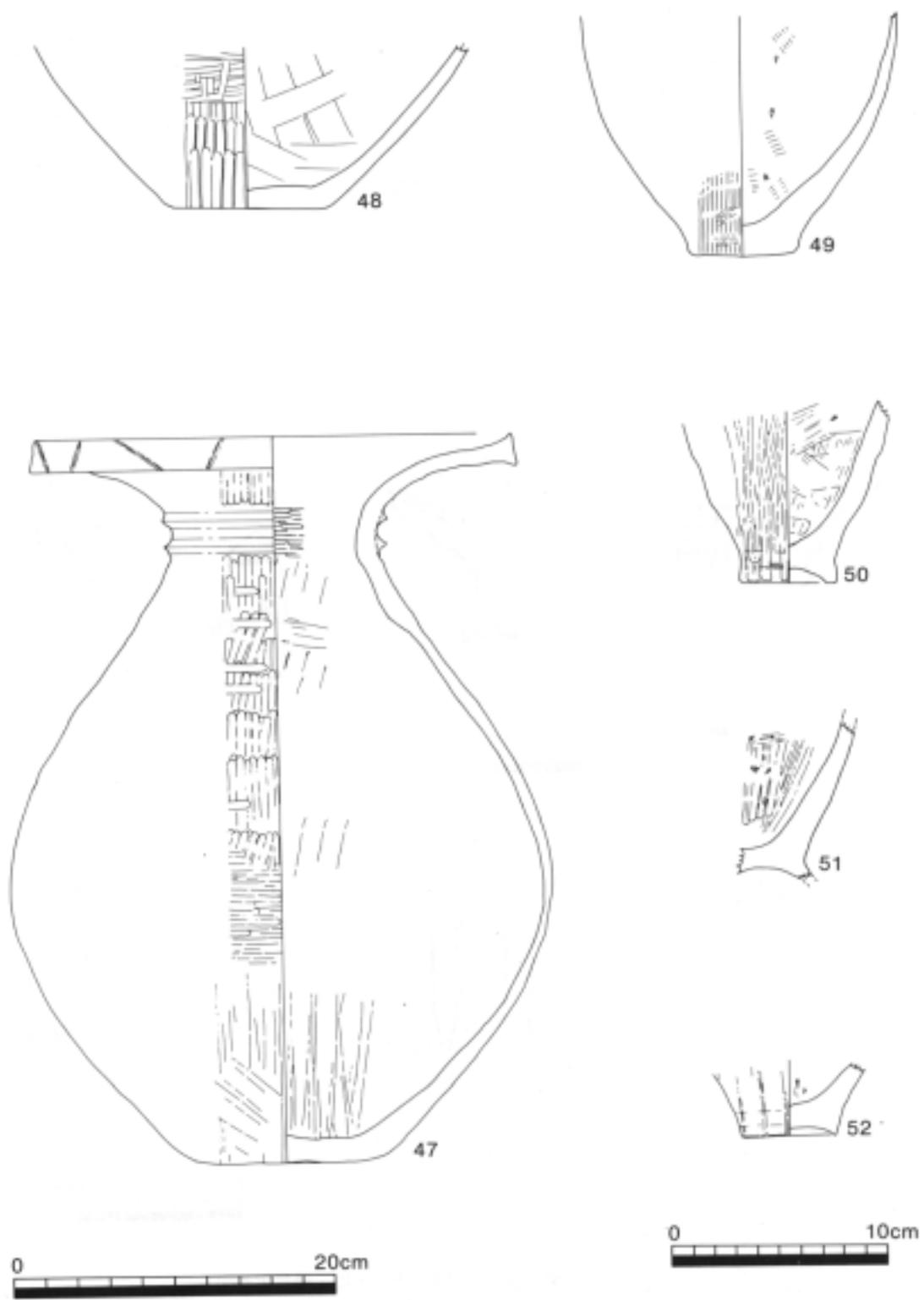
第15圖 倉重向山遺跡出土土器実測図(3)



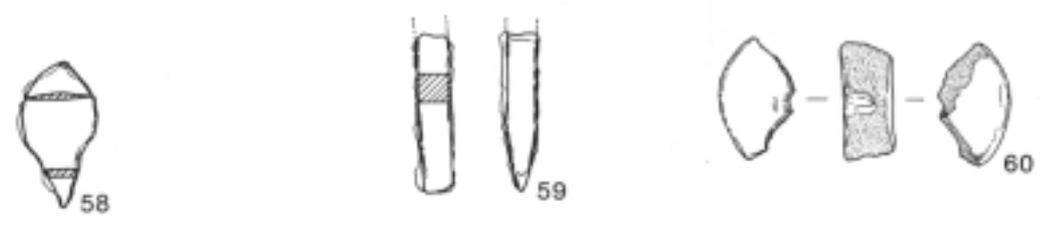
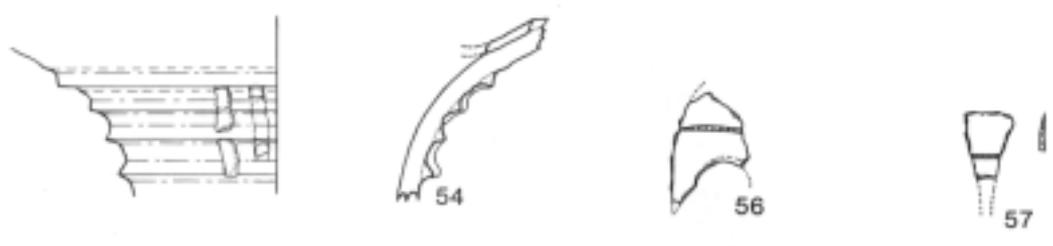
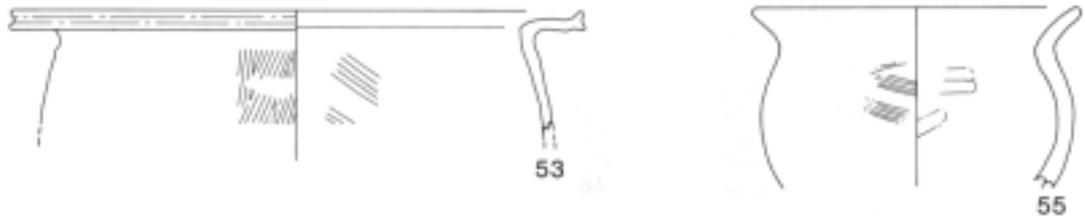
第16圖 會重向山遺跡出土土器実測(図4)



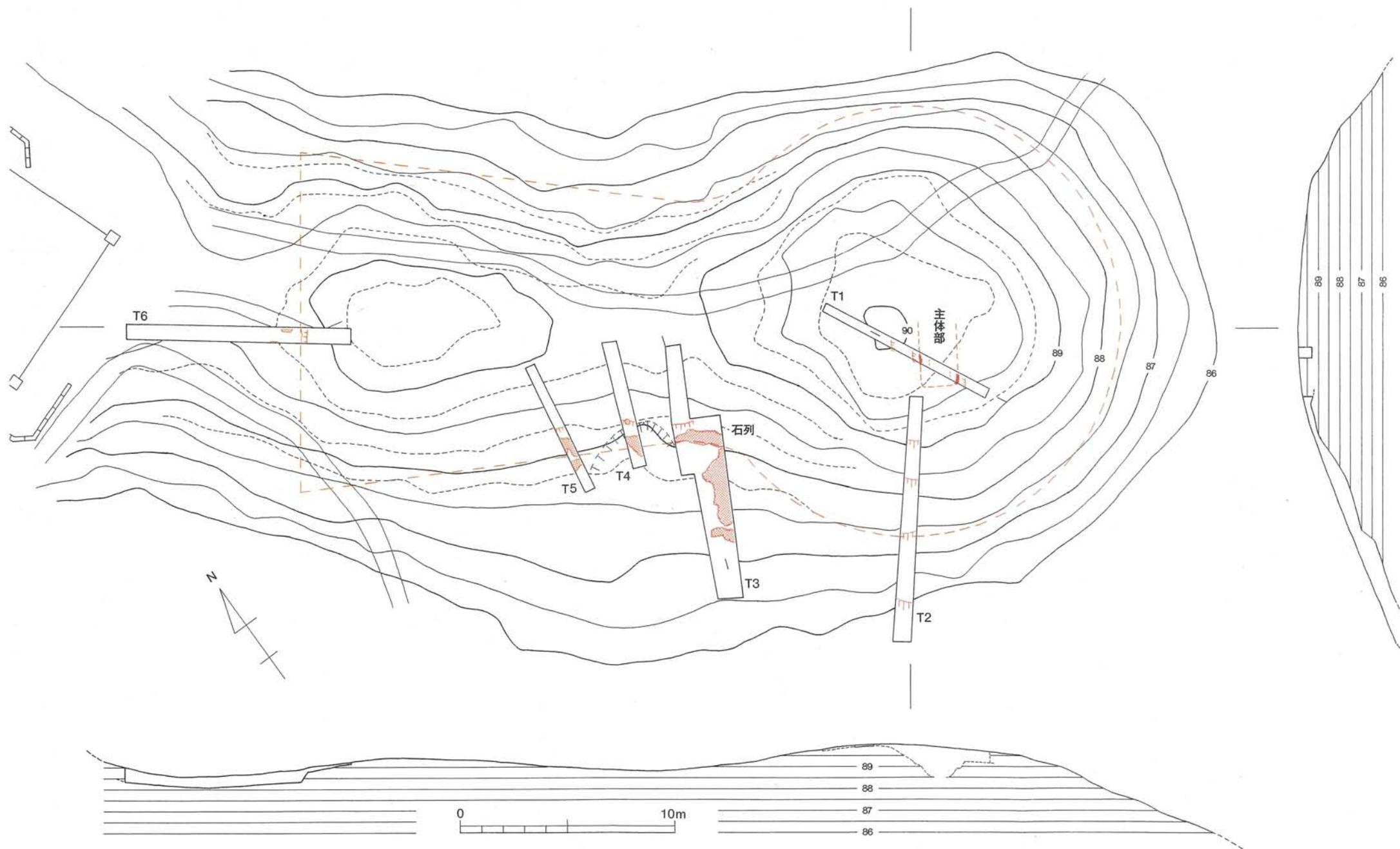
第17图 查重向山遺跡出土土器実測(図5)



第 18 图 倉重向山遺跡出土土器実測図(6)



第19図 倉重向山遺跡出土土器・鉄器実測図



第20図 倉重向山古墳地形測量図及びトレンチ配置図



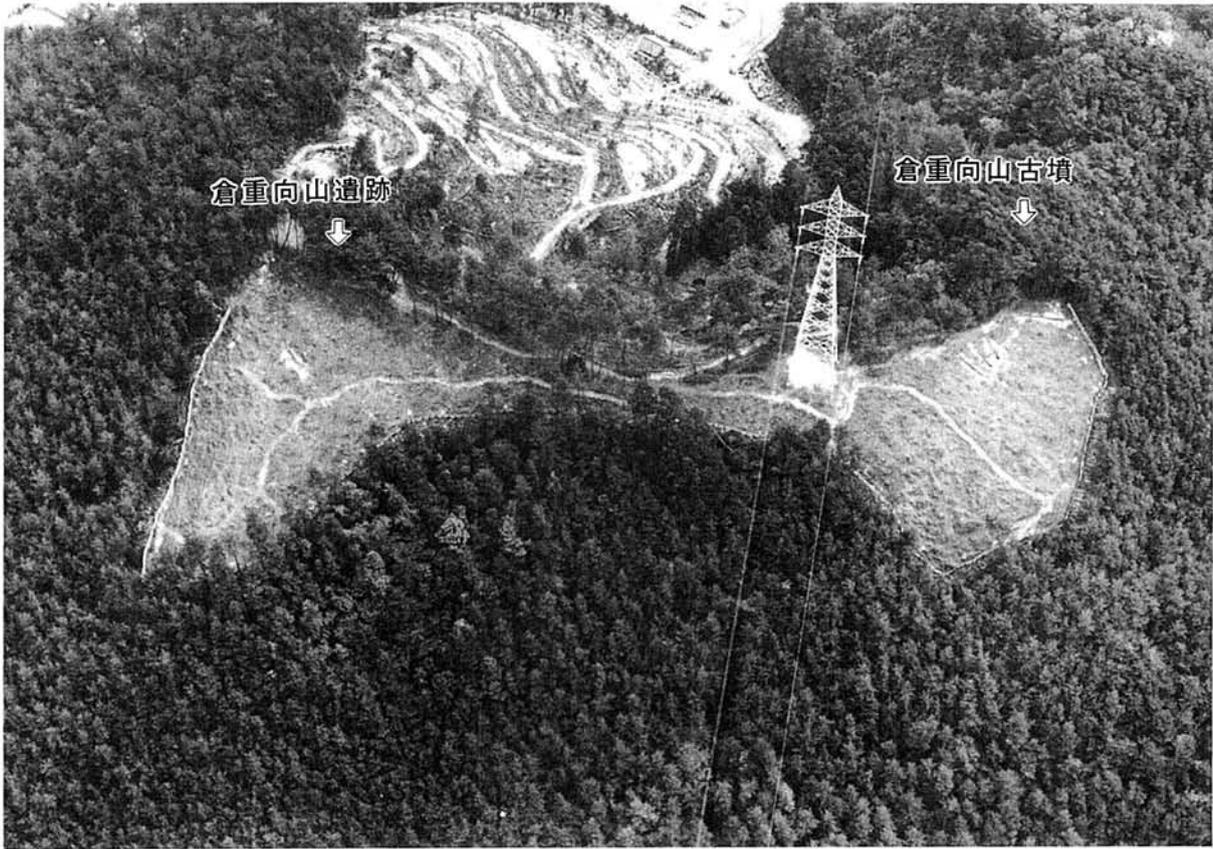
第21図 倉重向山古墳主体部 (T1) 断面図
 (アミ目は赤褐色粘質土)



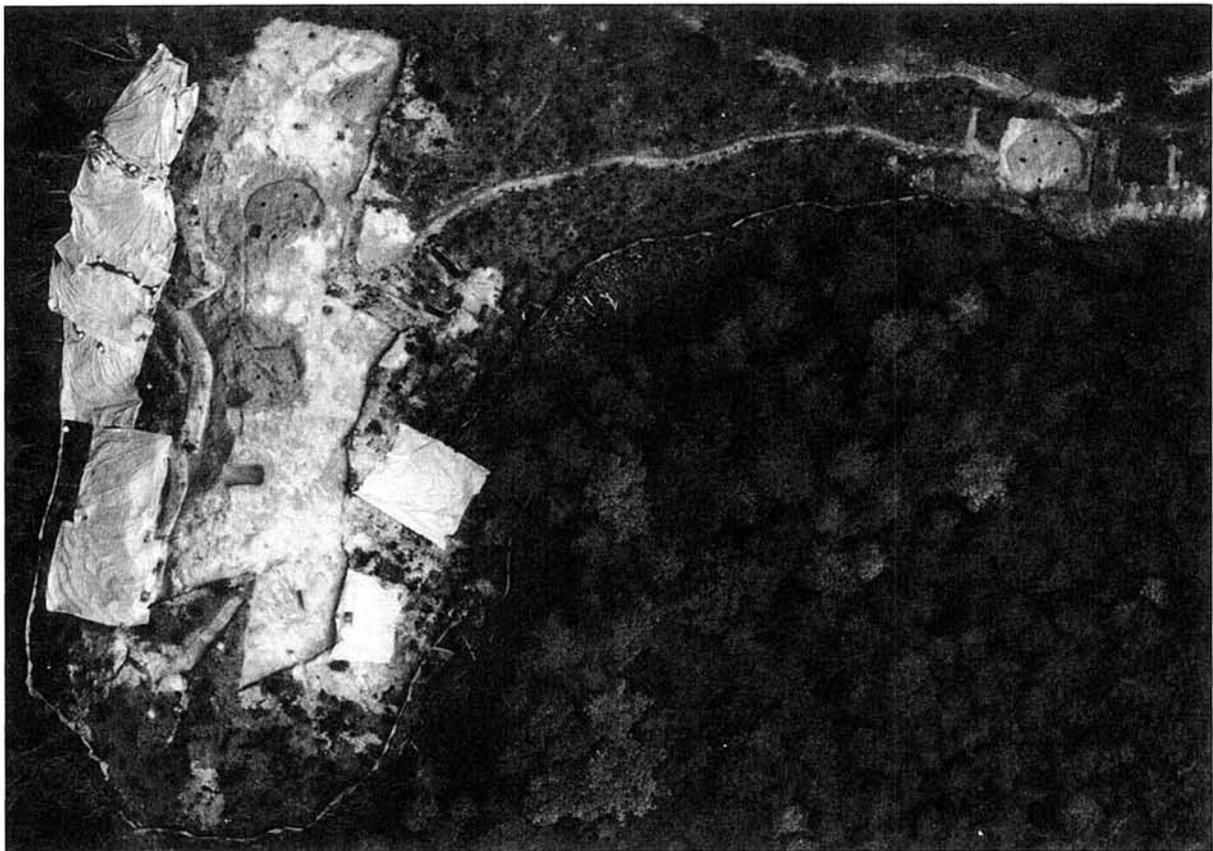
第22図 倉重向山古墳くびれ部 (T3) 断面図



圖 版



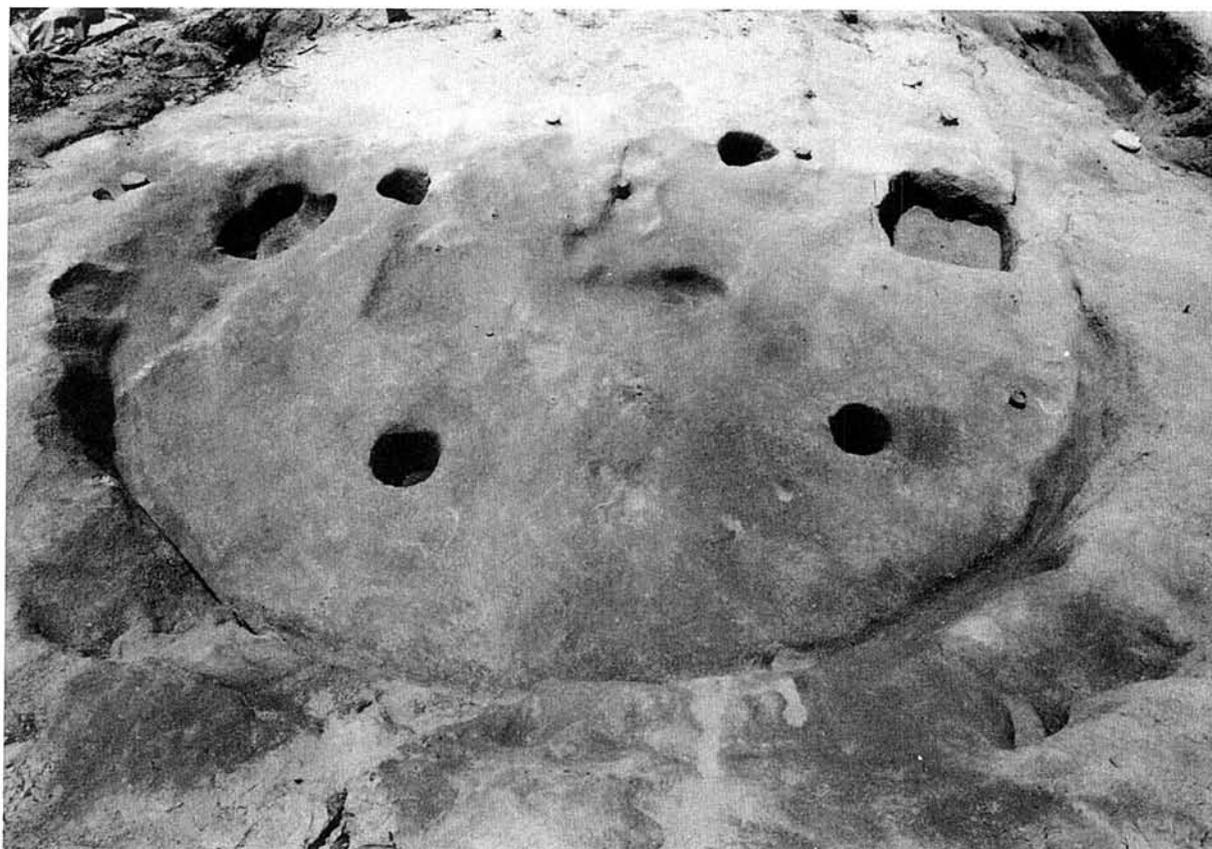
a. 倉重向山遺跡・古墳全景（調査前、南から）



b. 倉重向山遺跡全景（調査後、南から）



a. 第1・2号住居跡（東から）



b. 第3号住居跡（北から）



a. 第4号住居跡（西から）



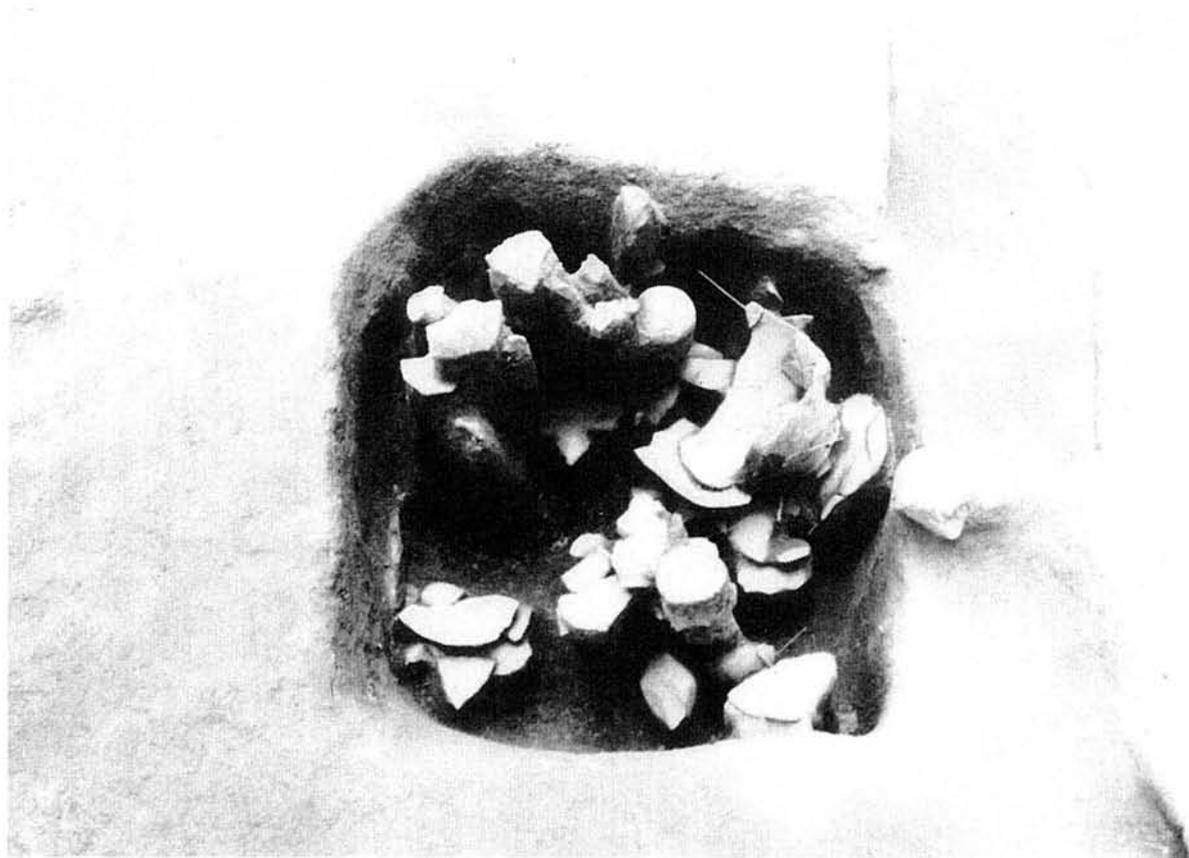
b. 第5・6号住居跡（東から）



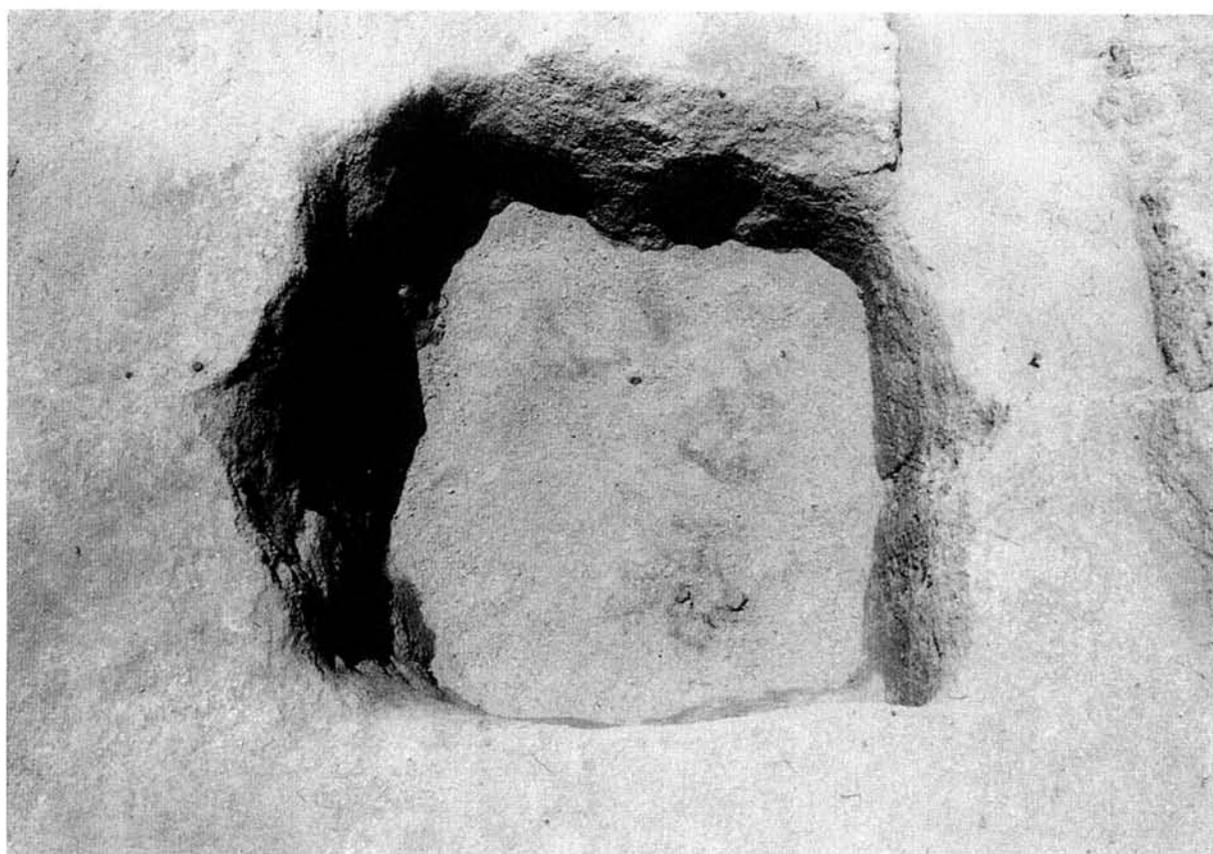
a. 第7号住居跡炭化物検出状況（西から）



b. 第7号住居跡（完掘後、東から）



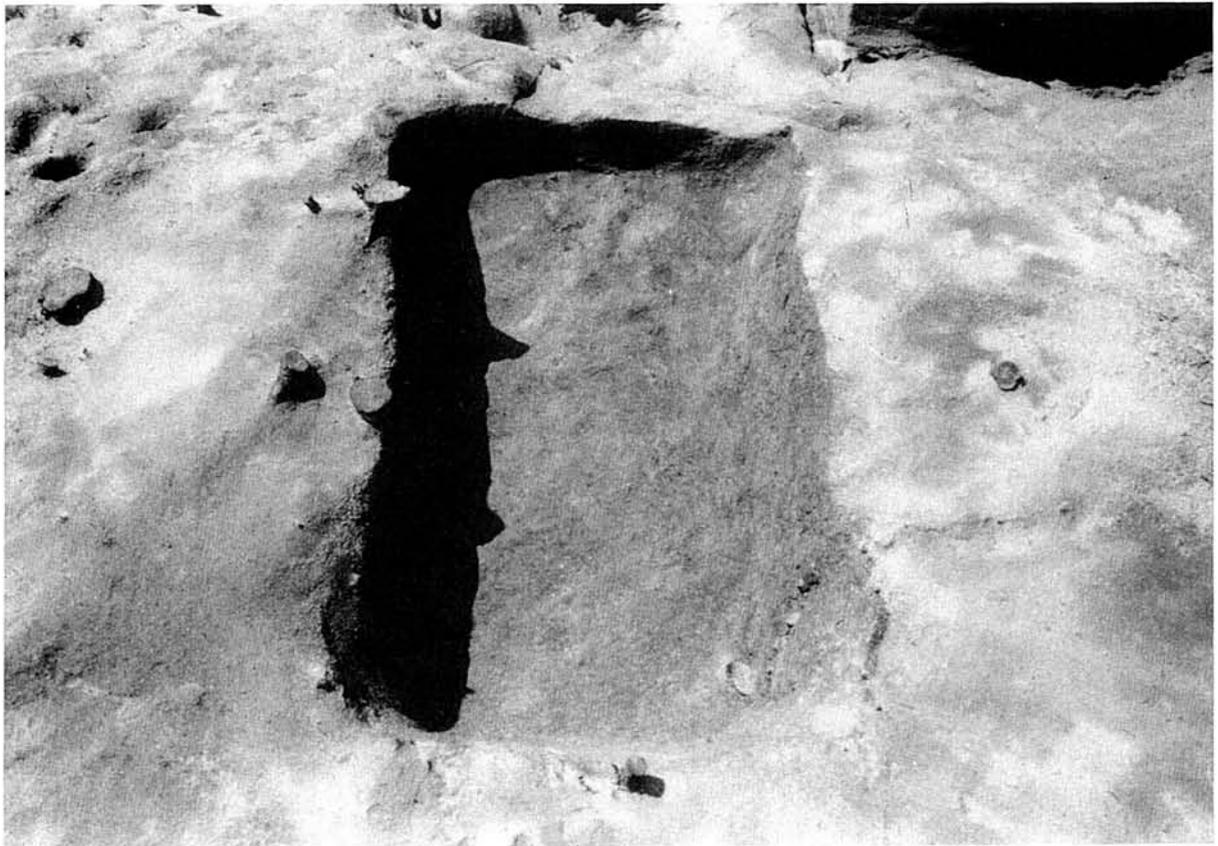
a. 第1号土壙土器出土状況（北から）



b. 第1号土壙（完掘後、北から）



a. 第2号土壙（南から）



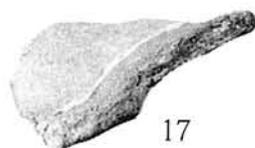
b. 第3号土壙（東から）



倉重向山遺跡出土土器 (1)



8



17



10



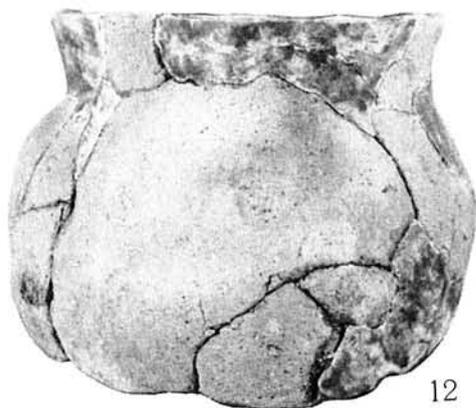
13



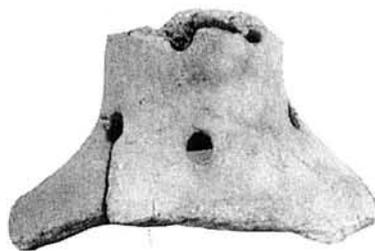
14



9



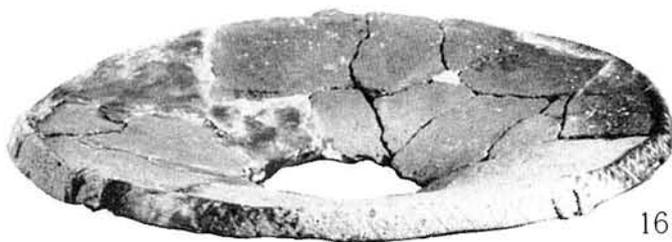
12



11



15



16



24



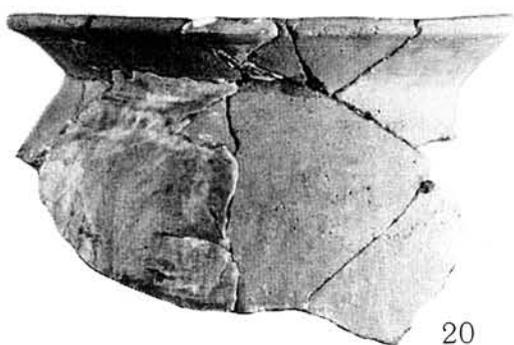
23



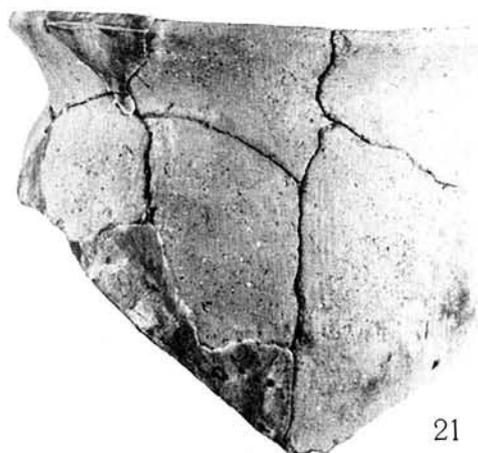
22



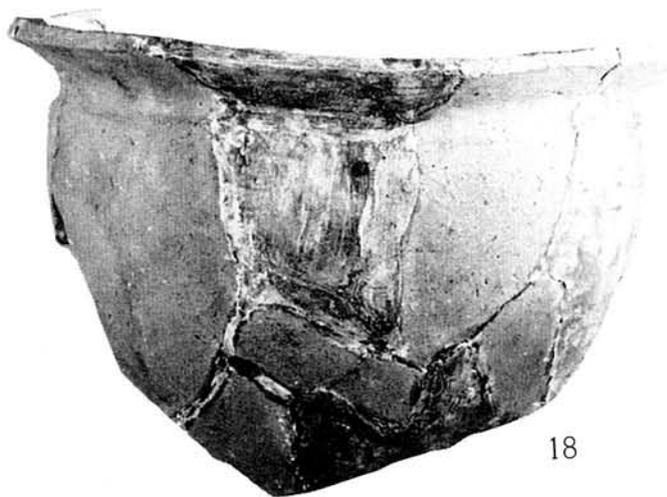
25



20



21



18



19

倉重向山遺跡出土土器 (3)



26



27



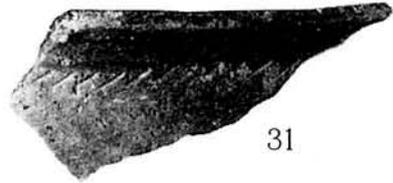
28



29



30



31



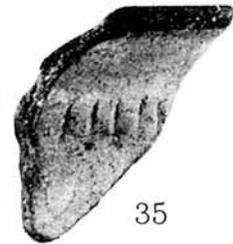
32



33



34



35



36



37



38



48



49



47



50



51



52

倉重向山遺跡出土土器 (5)



40



41



42



44



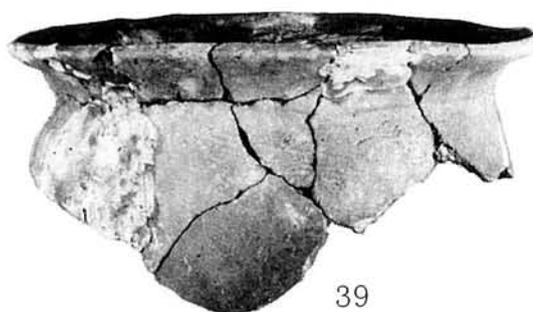
45



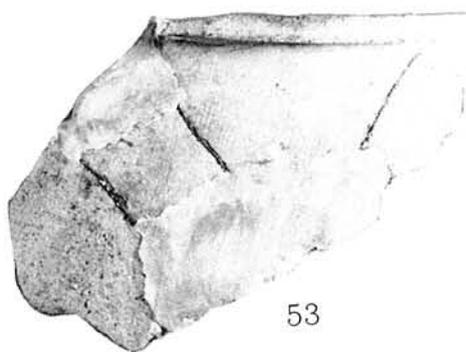
46



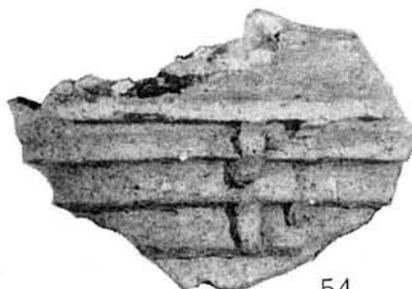
43



39



53



54



55



56



57



58



59



60



a. 倉重向山古墳遠景（調査前、南から）



b. 倉重向山古墳近景（調査前、前方部から）



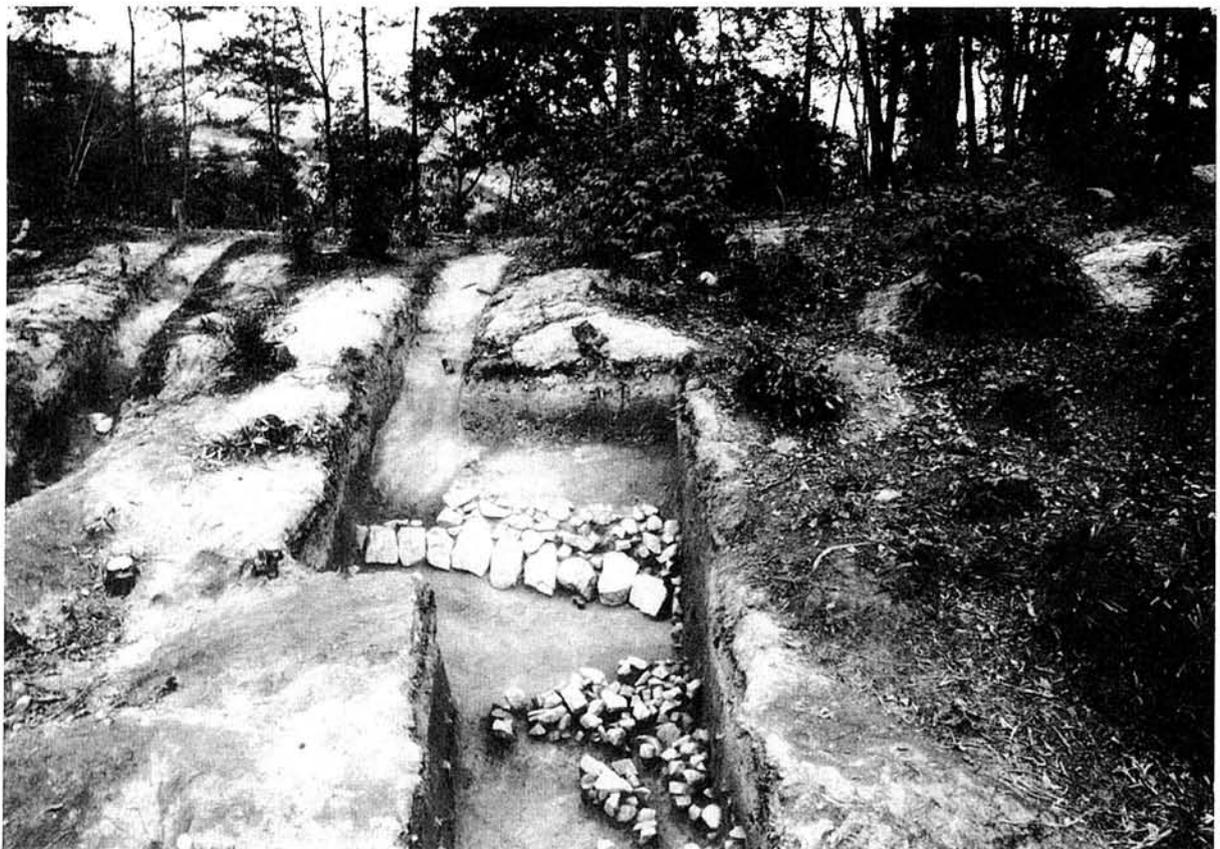
倉重向山古墳全景（調査後、西から）



第1トレンチ（主体部、南から）



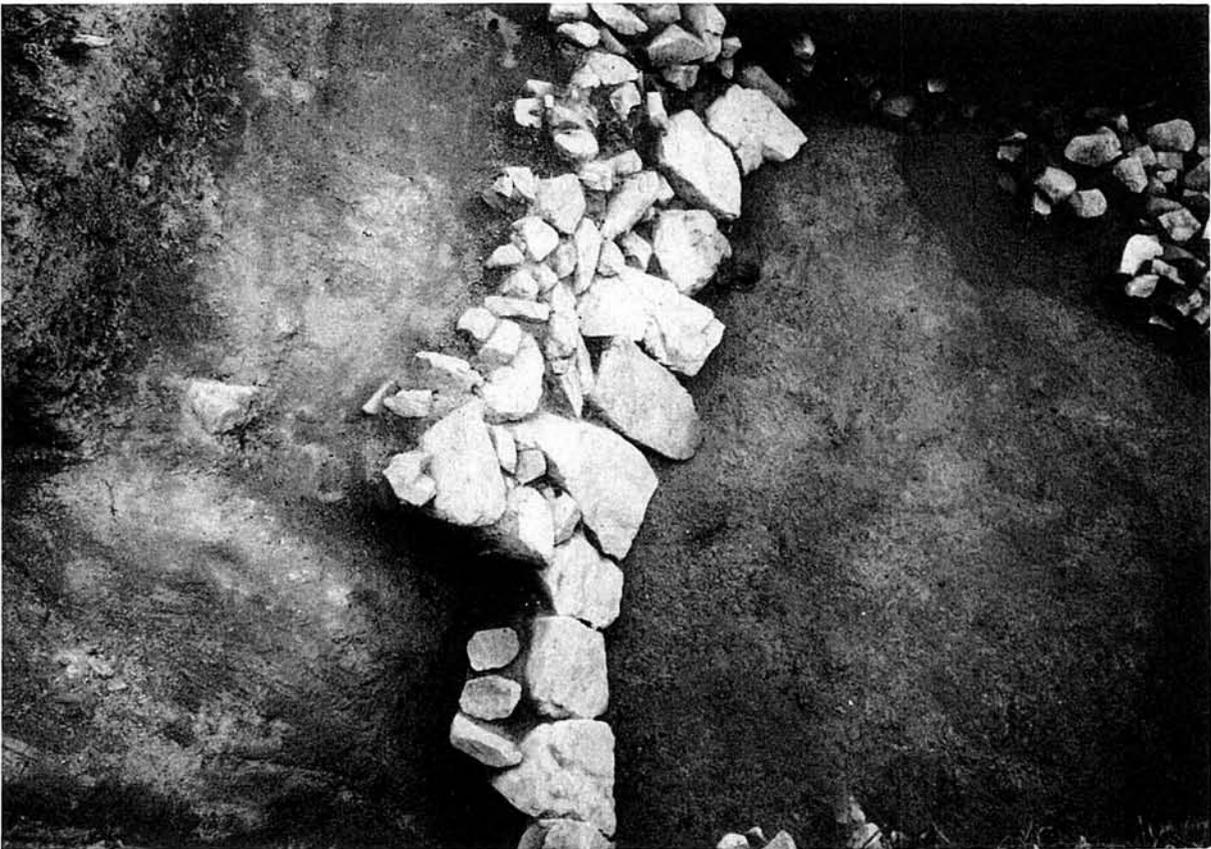
a. 第2トレンチ（後円部、南から）



b. 第3トレンチ（くびれ部、南から）



a. くびれ部石列検出状況（南から）



b. くびれ部石列検出状況（西から）



a. 第4・5トレンチ（前方部側面、南から）



b. 第6トレンチ（前方部正面、西から）

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第1集

広島市佐伯区倉重一丁目所在

倉重向山遺跡発掘調査報告

1991年3月

編 集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発 行

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印 刷 株式会社 中 本 本 店

広島市中区東白島町13-15